7～8世紀を中心とする新羅土器の形式分類

－「新羅王京様式」構築に向けての基礎研究－

重　見　　泰

1. はじめに

7世紀代は、新羅が中国王朝の影響を背景として三国統一を成し遂げ、東アジア社会に大きな変動が起こった重要な時期である。8世紀代においても、中国王朝は言うに及ばず、統一新羅と日本との間でも盛んに交易が行われており、各国独自の発展の中で絶えず影響を受け合っていた。このように、当該期の研究は各国の内的様相だけに注目して行えるものではなく、常に外的様相にも配慮すべきであり、各国間で同レベルの比較研究が望まれる。

しかし、韓国において、7世紀以降の考古学研究は決して活発と言えるものではなく、歴史叙述に必要不可欠な編年体系も十分ではない。これまでの研究では地域性が見落とされがちであったが、三国統一後も念頭におくならば、先ず、新羅中心地における土器様式の構築が必要であり、これを、私は「新羅王京様式」として提唱する。この様式論を展開するためには基礎的な研究を積み重ねていかねばならない。本稿の目的は、「新羅王京様式」構築の前段階として、当該期の新羅土器が一体どういった様相をもっているのかを把握することにある。すなわち、当時の土器群が、何種類のどういった器形からなり、土器質の種類による構成はどうなっているのかなどを明確にする最も基礎的な研究である。

これまでの新羅土器研究は古墳出土資料が中心に行われ、生活遺跡出土資料は報告される程度でしかなかった。しかし、7世紀以降、特に、統一新羅以降では古墳自体も減少し、遺物は王京や寺跡を始めとする生活遺跡からの出土が中心となるのであり、生活遺跡出土資料を中心とした土器研究が不可欠である。本稿では、生活遺跡である慶州市皇南洞376遺跡出土資料を中心に、7～8世紀代における新羅土器の形式分類を試みる。

2.「新羅王京様式」の提唱

6世紀中葉以降、新羅土器は形態変化が著しく、新しい器形が出現するなど大きな画期を迎える。現在、この時期の新羅土器を示す用語としては、「新羅後期様式土器」が広く用いられており、近年、これを細分する形で「統一様式土器」という分類が設定されている。

崔秉鉉氏は、それまで使用されてきた「新羅統一様式」という用語が、一定の政治的時代区分と同一であるという誤解を招くとして、政治的基点を意識せず従来の古新羅（様式）土器を「新羅前期様式土器」とし、統一新羅（様式）土器を「新羅後期様式土器」として呼ぶことを提案した。[(1)]

洪潽植氏は、「新羅後期様式土器」という設定が非常に長期間であり、その中にある画期を見落とす危険性があるとして、独自の編年案で三国統一期頃に画期を求め、「統一様式土器」という区分を設定する。[(2)] その概念は、申敬澈氏が定義したもの[(3)]を拡大・具体化したものであり、その定義は、新羅土器が大同江以南の韓半島全域の生活・祭祀・墳墓・建築・宗教・軍事遺跡などで普遍化されるような土器の出現とする。

確かに、6世紀中葉以降をすべて「新羅後期様式土器」と一括することは不適切かもしれないが、洪潽植氏が設

定する「統一様式土器」の定義では、それを示す比較対照があまりにも不明瞭である。すなわち、中心地である慶州でもこの時期の土器様式を把握し切れていない情況下において、慶州地域の土器様式が大同江以南の韓半島全域にどの段階で各地に普及し、普遍化したのかということを認識するのは困難である。さらに、新羅の三国統一以前には各国・各地域の土器様式が存在していたのであり、統一後、その基盤の上に新羅中心地の土器様式が展開していくにはさまざまなパターンが存在したと想定される。各地域において、統一新羅以降と考えられる土器をみると、当地で生産されたと考えられ形態や文様施文においても慶州地域のものとは少し異なるようである。したがって、その年代決定には多くの問題を含んでいる。

また、詳細な研究が進めば、慶州を中心とする土器様式と各地域に存在する土器様式に差が確認されるだろう。中心的な土器様式の拡散とその受容のあり方、それに伴う地域的な土器様式の発展という問題も含んでおり、果たして韓半島全域に普遍化したのかということと、どの程度をもって普遍化したと言えるのかという問題も生じてこよう。韓半島全域での斉一性に注目して様式設定を行う前に、まず、中心地である慶州地域での土器様式のあり方を明確にし、中心的土器様式という一つのまとまりとして捉えるべきである。

その際、時期的には統一新羅以降も対象となるため、単に新羅土器として編年を組むことは不適切である。つまり、統一後、新羅の中心である慶州地域の土器様式が各地へ拡散する中で、地域によってその受容のあり方が異なる可能性があり、中心地である慶州地域の編年を新羅土器として全域に応用するような印象を与える用語であるため不適切だと考える。さらに、当時の社会・文化様相の復元を目的とするならば、古墳出土資料に頼ることなく、また古墳の様式によってのみ段階設定や命名を行うことは不適当である。私は、古墳に替わる当該期の象徴的な存在は王京だと考える。

ところで、土器様相の変化とほぼ同時期に横穴式石室墳の出現という埋葬施設の変化も起こるが、その横穴式石室墳出現前後から新羅に最も大きな影響を与えたのは仏教である。6世紀前半には仏教が公認され、平野部では皇龍寺に代表される寺院の造営が相次いで行われていく。その後、善徳王代には、隣国からの災いを鎮める目的で皇龍寺に九層塔建立し、僧官の最高職である国統を兼ねる寺主をおくなど、皇龍寺が国家的寺院としての機能を持つようになり、仏教は護国仏教的な性格を強めていく[(9)]。そういった中で仏教は新羅の政治・社会・文化へ多大な影響を及ぼすようになる。仏教の普及とともに火葬も盛んに行われ、仏教が葬送観念自体を大きく変えていったことは間違いないだろう。横穴式石室墳の立地は、このような仏教の展開のもとに造営された寺院と入れ替わるように、それまでの積石木槨墓が平野へ造営されたのに対して王京周辺の山塊中腹から山麓に移っていった。

寺院が造営された平野部には王京が展開した。新羅の王京において、その坊名の設定は四六九年であり、少なくともこの頃には土地区画が存在したことが分かる（『三國史記』新羅本紀三　慈悲麻立干）。しかし、その区画は一度に計画され造営されたものではないことが最近の研究によって明らかになっており、徐々に都市空間として拡大していった。統一以降、王宮の整備を行い皇太子の宮である東宮（春宮）や池・臨海殿を造営したことや、王京の市が照知麻立干十二（490）年に初めて設置したという記事に始まり（『三國史記』新羅本紀三　照知麻立干）、智証麻立干十（509）年に東市が設置され（『三國史記』新羅本紀四　智証麻立干）、孝昭王四（695）年になって西・南市が設置された（『三國史記』新羅本紀八　孝昭王）ことからもそのことが窺え、寺院・諸宮の造営整備、坊里の拡大整備、市の増設などによってより充実した都市空間として展開していった。その繁栄ぶりを伝えるものとして、憲康王代（八七五～八八六）には次のような記事がある。

・「春，東野宅．夏，谷良宅．秋，仇知宅．冬，加伊宅．第四十九憲康大王伐（代），城中無一草屋．接角連墻．歌吹満路．昼夜不断．」（『三國遺事』紀異一　又四節遊宅条）。

・「第四十九，憲康大王之代．自京師至於海内．比屋連墻，無一草屋．笙歌不断道路．風雨調於四時」（『三國遺事』紀異二處容郎　望海寺条）。

・「(六（八八〇）年）九月九日　王與左右登月上樓　四望　京都民屋相蜀　歌吹連聲　王顧謂侍中敏恭日　孤聞今之民間　覆屋以瓦不以茅　炊飯以炭不以薪　有是耶」(『三國史記』新羅本紀十一　憲康王)。

このように、横穴式石室墳出現期以降、平野部（王京）は生活空間として充実していったことがわかり、その発端は仏教公認後の寺院造営といえよう。そして、統一後は国家体制の充実を図るためと考えられる王宮の整備も行われ、王京は新羅の中心地としてその体系を整えていく。当時の社会に於いて重要な位置を占めるのはもはや古墳ではなく、都市空間としての王京であるといってよかろう。それは統一新羅滅亡までつづくものである。

このように、王京は当該期の社会像を最も繁栄した存在と言えよう。このことを勘案して様式設定を行うならば、仏教公認以降、古墳の様式変化とともに発展していった王京を中心に据えるべきである。そこで、従来の新羅後期様式土器という段階設定を大様式とし、統一後の土器様式の拡散を考慮した中心的な様式の設定、いわば小（地域）様式として「新羅王京様式」の設定を提唱する。すなわち、慶州（王京）を中心とする地域を対象とし、その内容として、供膳形態において椀類が主器種となり印花文の定着・普遍化が見られる段階以降とする。椀類は、それまでの有蓋高坏に替わって供膳形態で中心形式となるものであり、以後の様式展開を把握する指標となりうるものである。したがって、その出現をもって画期と見なすことは許されるだろう。

3. 皇南洞376遺跡の概要

ここでは、以下の形式分類で中心的に扱う、韓国慶尚北道慶州市に所在する皇南洞376遺跡について説明する[5]。当遺跡は、東國大學校慶州キャンパス博物館が1994年３月28日から６月30日にかけて発掘調査したもので、周辺には東に新羅の中心地であった月城、南に財買井址（推定金庾信宅)、北方に新羅の王陵墓を含む古墳群が広がっており、慶州市内でも重要な位置を占めている。発掘では層位的な調査が行われ、統一新羅時代の遺構が確認された生活遺跡である。遺物は分析に耐え得る十分な量が出土しており、質的にも重要なものを多く含んでいる。資料は、当博物館が保管している。

層序は大きく四層からなり、上から第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅳ層である。第Ⅰ層では、墻状施設・井戸・積心石などが確認され、第Ⅱ層では、竪穴遺構4基・木製槽製井戸1基・積心などが、第Ⅲ層では、木柱と木柵・集石遺構などが確認された。第Ⅳ層では、調査が途中で終了したため遺構の確認はされていない。

遺構は第Ⅰ層から第Ⅲ層まで確認されるが、その大半が第Ⅱ層に形成されている。第Ⅱ層に形成された１號竪穴は、東西250㎝、南北280㎝、深さ60㎝の円形土坑で、出土遺物には、滑石製印章、石錘、木簡、草鞋、櫛、骨角器、土器などがある。慶州地域での木簡の出土は雁鴨池・月城垓字に続く珍しい例であり、木簡には高床式倉庫を示す「椋」の記載があり、倉庫の穀物出納を記録した内容が記載されている[6]。これが、官営工房の可能性が指摘される他の生産関連遺構や遺物と関連をもち、木簡の「椋」が官営施設であるならば、統一新羅の物品管理やその施設に関する貴重な史料となる。同じく第Ⅱ層形成の４號竪穴は南北514㎝、東西280㎝、深さ30㎝の土坑であるが、その床面で爐跡が３基確認されている。ガラス塊が出土することや、床面にガラスが溶着することからガラス生産関連施設と考えられている。また、爐跡は確認されていないが、２号竪穴も試料分析の結果から同様の性格が指摘されている。

遺物の大半は第Ⅱ層と第Ⅲ層からの出土だが遺構の形成が多いのは第Ⅱ層で、特徴的なものとして、銅とガラス生産用の坩堝や取瓶がある。銅生産用のものは、その容量が韓国出土例中でも大きい方であることから当遺跡の工房を国家が管理する工房と考えられている。

このように、当遺跡は統一新羅期の生活遺跡の中でも官営工房に関連するものと考えられることから、出土土器の多くは一般民衆が廃棄したものではなく、官営施設において使用・廃棄された可能性が高い。よって、新羅土器

の中心様式を捉えるにはよい資料だと考える。

遺跡の年代については別稿にて検討したが[7]、第Ⅳ層が6世紀中頃～後半、第Ⅲ層が6世紀末～7世紀前半、第Ⅱ層が7世紀末～8世紀前半という年代が考えられる。

4. 形式分類

分類作業においては「形式」・「型式」・「様式」の概念を用い、必要に応じて細分した。「形式」とは、単なる形態による分類ではなく、主として用途・機能による分類単位であり、「型式」とは、形式の技術的・形態的特徴によって分類され時間的方向性を示す分類単位であり、「様式」とは、各型式組列を同一時期に該当する土器群でまとめた単位であって、各形式が同一の時期・空間における社会生活の要求を満たす複合体を指す[8]。このうち、本稿では形式分類を行う。

形態的特徴・用途・機能から大別を行い、その上で数値的分析や細かな形態差をもとに細分を行った。しかしながら、用途・機能をもとに分類を行うという作業は、それ自体が土器研究の最終的な目的であり、その設定自体が仮説の提示であって常に検証されなければならないものである。特に基礎研究のない複雑で混沌とした資料の中からの分類作業では、その分類が形式であるのか型式であるのかの判別や認識は非常に困難である。したがって、ここで行った形式分類は、将来、型式差として分類すべきものを含んでいる可能性も十分にあり、そういった意味で便宜的なものである。

ここでは、形式を4つに分類する。当時の社会的需要に応じ、製作段階に於いて基本的な用途・機能を考慮して作り分けたと考えられるものを「第一形式」、その中でもさらに機能的側面を重視して作り分けられたものを「第二形式」、それをさらに集団性や用途・機能の分化によって現れたと考えられる形態的特徴を「第三形式」とする。この第三形式は用途の差によると考えられる法量の差によって細分され「第四形式」とする。第四形式は法量の差を示す各属性によって細分されるものである。また、産地差を現すであろう胎土の違いや成形・調整技法[9]の違いからさらに細分されるが、煩雑になるためここでは分類単位を設けないでおく。

以下、第一形式ごとに説明し、第二形式以下の分類を行うこととする。第二形式の分類における名称は、便宜上、高坏A、高坏B・・という具合に命名する。（　）内の名称は韓国でよく用いられる名称である。ここでの分類・分析・記述に関しては、皇南洞376遺跡出土資料を中心に行うものであるが、報告書に掲載されていない小片も対象とした。当資料と関連すると考えられるものについては、適宜、他の遺跡の資料を挙げている。また、焼き物の種類（質）については、基本的に陶質土器であり、それ以外のものについては随時説明を行う。

1. 高坏（図1）

脚部をもつ杯形または皿形の身をもつ土器をいい、基本的に印花文によって飾られないものをいう。第二形式には、高坏A（有蓋高坏）、高坏B（短脚高坏）、高坏C（台付椀）、高坏D（台付椀）、高坏E（高坏）、高坏Fの6種類がある。

高坏A：口縁部に蓋の受部をもつやや浅めの身部に、1～2条の突帯を有する脚部をもつものであり、基本的に透し孔を穿つ。口径と脚部の形態から以下の2つの第三形式に分類される。

A1＝脚部に1～2条の突帯を有し透し孔が2段に穿孔されるもの。身部高と脚部高の比率において脚部の方が大きいもの。

A2＝脚部に1条の突帯を有し透し孔のないもの。身部高と脚部高の比率において脚部の方が小さいもの。

さらに口径から第四形式に分類されるが、ここでは煩雑さを避けるため次に説明する高坏Bも同じ基準で分類す

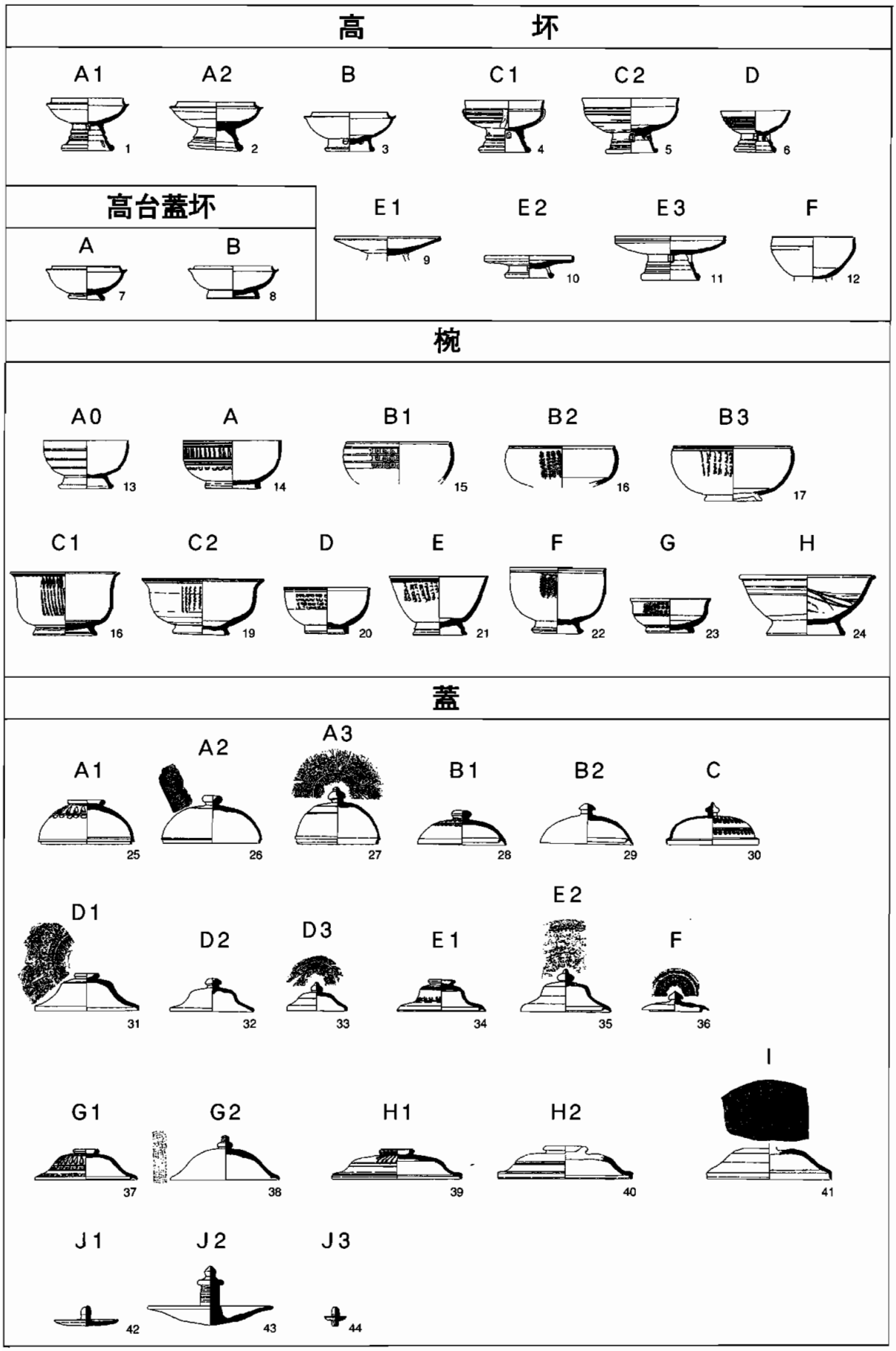
高　坏
A1
A2
B
C1
C2
D
1
2
3
4
5
6
高台蓋坏
A
B
7
8
E1
E2
E3
F
9
10
11
12
椀
A0
A
B1
B2
B3
13
14
15
16
17
C1
C2
D
E
F
G
H
16
19
20
21
22
23
24
蓋
A1
A2
A3
B1
B2
C
25
26
27
28
29
30
D1
D2
D3
E1
E2
F
31
32
33
34
35
36
I
G1
G2
H1
H2
37
38
39
40
41
J1
J2
J3
42
43
44

図1　形式分類（1）（S：1/8）

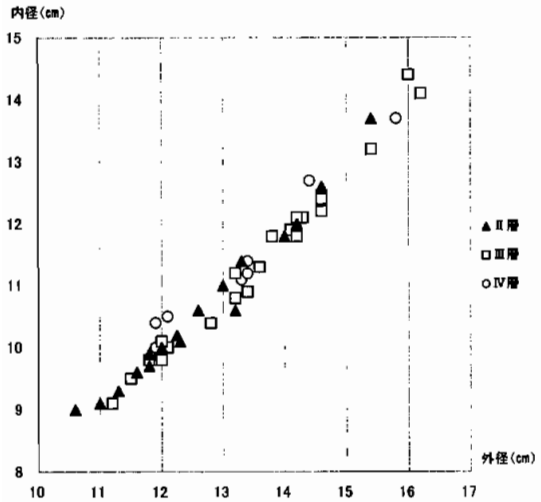

図２　高坏Ａ・Ｂ類口径分布

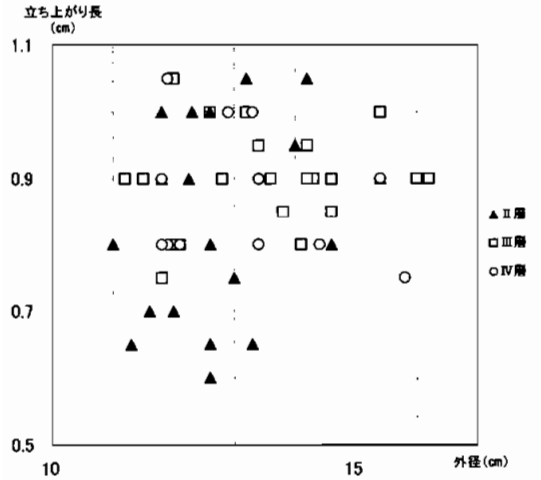

図３　立ち上がり長分布

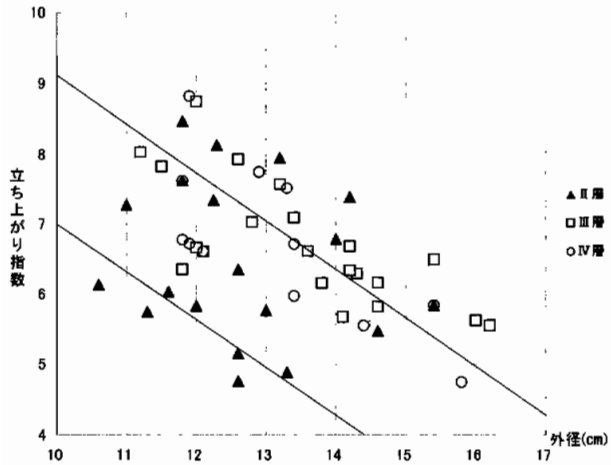

図４　立ち上がり指数

る。そこで、口縁部の蓋受け部の径（外径）と立ち上がり部の径（内径）の比率によって分類を試みた（図２）。これをみると大きく５つに分類でき、小さい方からⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴとする。層位別にみるとⅢ下層ではⅠが見られないがそれぞれのまとまりはしっかりとしている。Ⅲ上層ではⅤが見られるようになり、各群のまとまりが疎らになっている。Ⅱ層ではⅢ上層の傾向を進めた状態になる。全体として、５つの群を保ちながらも元のまとまりから縮小傾向にあることが窺える。

さらに、立ち上がりの長さを層位ごとにみるとⅡ層で短いものが新出することが分かる（図３）。身部全体に対する立ち上がりの比率変化をみるため、口径と立ち上がりの長さの比（立ち上がり長÷口径×100：以下、立ち上がり指数と呼ぶ。）を用いて表した（図４）。全体として、右肩下がりの分布を示し、口径が大きくなるほど身部全体に対する立ち上がり長の比率が小さくなっている。すなわち、立ち上がり長は口径に比例して変動するのではなく、ほぼ一定の長さを保っている。やはりⅡ層で指数の小さなものが増加しており、それらは先に見た口径分類Ⅰ～Ⅲで顕著である。こうしてみると、身部全体に対する口縁部立ち上がり部の比率は、従来の指摘通り編年に利用できると解釈して良かろう。そして、それを最も反映しているのは口径分類Ⅰ～Ⅳのやや小型のものである。口径分類Ⅴでは、層位ごとで立ち上がり指数に差がほとんどなく、もともと低いものが存在したようである。立ち上がりについては別稿で詳述したので参照されたい。[10]

以上のように、口径分類によってⅠ～Ⅴに分類でき、その群の中でも古相と新相が認められた。したがって、これらの群は時間性を超えたものと理解できよう。口径分類ⅠのⅣ層での不在や口径分類Ⅴでの新古相の不明確さといった問題が残るものの、ここではひとまず高坏Ａ・Ｂの口径を次の5形式に分類する。

Ⅰ：　口径11cm前後のもの。

Ⅱ：　口径12cm前後のもの。

Ⅲ：　口径13cm前後のもの。

Ⅳ：　口径14.5cm前後のもの。

Ⅴ：　口径15.5cm前後のもの。

Ａ１には第四形式のⅡ・Ⅳ・Ⅴが、Ａ２には第四形式のⅢがそれぞれ認められる。Ａ２は突帯が一条で透し孔をもたないが、他の遺跡出土資料をみると基本的に一段透かしで１～２段の突帯を巡らすものがある。

高坏Ｂ：高坏Ａと同様の身部に、突帯のない低い脚部を有するもので透し孔をもつものもある。いわゆる短脚高坏である。

Ｂ１＝脚部端部が肥厚するやや高い脚部をもち、透し孔を有するもの。

Ｂ２＝脚部の径が比較的小さいもので、やや高く踏ん張った形態の脚部をもつ。

これらは型式差として捉えられる可能性がある[11]。

粗製形式：脚部が欠損しているため高坏Ａ・Ｂの分類はできないが、他の個体に比べて成形・調整・胎土において粗雑な一群が認められる。焼成度や色調においても差が認められる。一群と表現したものの、その中でも特に各個体の形態的特徴は様々である。粗雑な形式として第三形式のレベルで分類できるかもしれないがここでは細分しない。

高坏Ｃ：１～２条の突帯を巡らし１～２段の透し孔を穿つ脚部をもち、体部に２～３条程度の沈線を巡らす。口縁部で内側に絞り込むように屈曲し口縁端部が再び外側に開くものであり、退化した把手をもつものもある。口縁部の屈曲部は端部成形の粘土接合によって生じるものであるが、その屈曲が小さく滑らかであり、口縁端部を接合したというよりも体部から引き出したような形態のものも認められる。その脚部は体部に比べて相対的に小さい。このような口縁部や全体のプロポーションにおける形態差から２つの第三形式に分類する。

Ｃ１＝脚部は太くしっかりと踏ん張り、１～２条の突帯を巡らし１～２段の透し孔を穿孔する。口縁部は内側に窄んで「く」字に屈曲し再び外へ開くもの。

Ｃ２＝脚部はやや細く低いもので、１～２条の突帯を巡らし１段の透し孔を穿孔する。口縁部の屈曲は緩やかであり端部は外へ開くもの。体部の沈線は概して細く浅いものである。

これらは口径の差によって大きく４つの第四形式に分類される。但し、高坏Ｃは出土数が少なく統計的処理を十分行えなかったため、口径分類においては今後検討が必要である。

Ⅰ：　口径10cm前後のもの。

Ⅱ：　口径12cm前後のもの。

Ⅲ：　口径14cm前後のもの。

Ⅳ：　口径17cm前後のもの。

Ｃ１にはⅡ、Ⅲ、Ⅳが、Ｃ２にはⅠ、Ⅲがそれぞれ認められる。また、Ｃ１は口径に対する身部の高さの比である径高指数（身部高÷口径×100）によってさらに２つに分類できる。以下、他の形式においても径高指数による分類が可能な場合は同様の表記を行う。

h（high）：　径高指数が45前後のもので、口径に比べて身部高が比較的高いもの。

l（low）：　径高指数が35前後のもので、口径に比べて身部高が比較的低いもの。

１のなかには身部の極端に浅いものがあり、これらは分類すべきかも知れないがここでは一旦おいておく。

この高坏Ｃは、従来、無蓋高坏と呼ばれていたように蓋を伴わないと考えられていたが、資料が増加するにつれ蓋を伴うものが多く確認されるようになっている。口縁端部を注意して観察すると、蓋を重ねて焼成した痕跡をとどめているものが確実に存在しており、本来、蓋と組合せとなる形式であることが分かる。但し、その中には身部内面に自然釉が厚くかかり、底部内面に他個体の高台を重ねて焼成した痕跡をとどめるものも存在する。ここでは、こういった焼成法の違いから２種類に分類する。

E（exist）：　焼成時に蓋と組み合わせていたと考えられるもので、口縁端部に自然釉化した例が多い藁状痕跡をとどめるもの。

L（lack）：　焼成時に身同士を重ね焼きしたと考えられるもので、底部内面に脚部下端部径とほぼ同大で円形の重ね焼きの痕跡（藁状痕跡）をとどめるもの。

高坏D：突帯を１条巡らし１段の透し孔を穿孔する脚部をもち、口縁部が底部からやや彎曲しながら立ち上がり斜め外上方へ向けて伸びるもの。体部には３～４状の沈線を巡らす。ここでは第三形式レベルでのバリエーションは認められないが、口径によって２つの第四形式に分類される。

Ⅰ：　口径11cm前後のもの。

Ⅱ：　口径15cm前後のもの。

高坏E：透し孔を穿孔した脚部に皿状の身部がつくもので、脚部には突帯を巡らすものもある。口縁端部の形態や脚部の形態から３つの第三形式に分類できる。

Ｅ１＝身部は底部から直線的に伸びて口縁部に至り端部でやや肥厚し、外側でやや面をもちながら軽く上方へ伸びるもの。脚部の状態は不明であるが、おそらく、無突帯で低く端部で巻き込むような形態のものがつくと思われる。

Ｅ２＝端部が団子状に肥厚し１段の透し孔を穿孔した低い脚部に、底部から口縁部までがほぼ水平に伸び、口縁端部で直上方向にしっかりと伸びるもの。口縁端部外面には沈線が巡る。

Ｅ３＝突帯を２条巡らし１段の透し孔を穿孔するやや高い脚部をもち、底部から若干彎曲しながら伸びて口縁部に至り口縁端部で直上方向に伸びるもの。口縁端部外面には沈線が巡る。

高坏Ｅは出土数が少なく、これ以上の形式分類は今のところできない。

高坏F：瓦質の土器であり、脚部が欠損していて不明である。比較的径の小さい脚部から体部がやや深く立ち上がり口縁部で屈曲して上方へ直に伸び、口縁端部は内傾する面をもつ。体部と口縁部との境界には接合痕が沈線状に残る。

2. 高台蓋杯（図１）

本来、短脚高坏として一纏めにされていたものだが、上述した高坏Ｂとは系統をまったく異にする可能性があり、高坏とは区別して分類する[12]。高坏Ｂよりも脚部が短く高台状のものをいう。脚部の形態から２つに分類される。

高台蓋杯A：脚部の径が比較的小さいもので、低い高台状の脚部が付き端部は丸く肥厚する。その断面形は丸いものが多いが方形に近いものもある。

高台蓋杯B：脚部の径が比較的大きいもので、低い高台状の脚部でありその断面が方形を呈するもの。

高坏Ｂ、高台蓋杯類は、先に示した高坏Ａ・Ｂ類の口径分類から第四形式がⅠ、Ⅱ、Ⅲの３つに分類できる。高坏Ｂ１にはⅢ、高坏Ｂ２にはⅠ、高台蓋杯ＡにはⅠ・Ⅱ、高台蓋杯ＢにはⅡ・Ⅲがそれぞれ認められるが、脚部まで確認できるものが少ないため各形式でⅠ～Ⅴの規格が存在した可能性は高い。

3. 椀（図１）

高台をもつ椀形の土器で蓋を伴うものをいい、基本的に印花文によって多く飾られ装飾性に富むものである。第二形式以下の分化が最もバリエーションに富んだものであり、中心的な形式と言える。第二形式には、椀Ａ（盒）、椀Ｂ（盒）、椀Ｃ（盒）、椀Ｄ（盒）、椀Ｅ（盒）、椀Ｆ（盒）、椀Ｇ（椀）、椀Ｈ（大形臺附椀）の８種類がある。以下、皇南洞376遺跡出土のものを中心に説明し、それ以外については簡単に触れることにする。

椀A：基本的にやや踏ん張った低い高台をもち、平坦な底部から口縁部がやや彎曲しながら立ち上がり口縁端部はまっすぐ上方へ伸びるものである。施文された文様には様々なものがある。形態や文様の有無により２つの第三形式に分類する。

A０＝径の大きい比較的高く踏ん張った高台がつき、体部は底部から彎曲して立ち上がり体部には２～３条程度の沈線を施す。椀Ａの祖形である可能性がある。しかし、その系譜や変化などについては考慮すべき点が多いため、ここでは以下で行う第四形式の対象とはしなかったが、法量によって分類できるものである。

Ａ＝基本的に径が大きく低い高台がつき、体部は底部から緩やかに彎曲しながらやや斜め上方へ伸びて口縁部に至り口縁端部は丸く収めるもの。口縁外面直下と体部には沈線が施され、その間を単体スタンプによって施文するものや、縦長連続文によって施文するものがある。

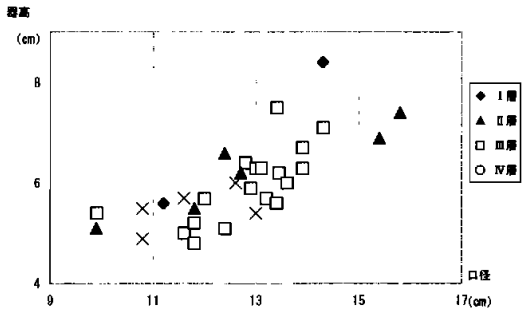

図５　椀Ａ法量分布

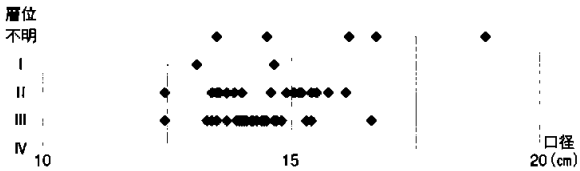

図６　椀Ａ口径分布

これらを皇南洞376遺跡における法量分布（図５・６）や他の資料などから以下の８つの第四形式に分類する。

Ⅰ：　口径10cm前後のもの。

Ⅱ：　口径12cm前後のもの。

Ⅲ：　口径13.5cm前後のもの。

Ⅳ：　口径16cm前後のもの。

Ⅴ：　口径17cm前後のもの。

Ⅵ：　口径18.5cm前後のもの。

Ⅶ：　口径20cm前後のもの。

Ⅷ：　口径23cm前後のもの。

口径分類Ⅳ～Ⅵは資料数が少なく明確ではないため、資料数が増えれば一つか二つにまとめられる可能性が高い。層位ごとの口径分布をみるとⅡ層で明らかに15cm以上の大形形式が増加している。時間の経過と共に口径の大形化、大形形式の出現が進んだものと思われる。このうち、ⅢとⅣとは器高の差によってｈとｌとに分類される。

椀Ｂ：低い高台をもつ平坦な底部からやや強く彎曲しながら口縁部に至り、口縁端部が内側に窄んだ形態のものである。文様や形態的特徴から３つの第三形式に分類する。

Ｂ１＝体部は緩やかに彎曲して体部上部で最も張り出して口縁部にいたり、口縁端部は内傾する。口縁外面直下から体部ほぼ中央にかけて沈線と単体スタンプ施文を繰り返す。

Ｂ２＝体部下部で角度をもって上方へ伸び始め、彎曲して短く伸び口縁部に至る。口縁端部は内傾し、口縁外面直下に沈線を施しその下に縦長連続文を施す。

Ｂ３＝口径の比して径の小さい高台がつき、体部は下部で角度をもって上方へ伸び始め、彎曲して上部で最も張り出して口縁部へ至る。口縁端部は内傾する。口縁外面直下に沈線を施し、その下に縦長連続文を施す。

これらを口径により３つの第四形式に分類する。

Ⅰ：　口径13cm前後のもの。

Ⅱ：　口径15cm前後のもの。

Ⅲ：　口径17cm前後のもの。

Ｂ１・Ｂ２がⅡ、Ｂ３がⅢに分類できる。

椀C：比較的低い高台をもつ平坦な底部から、横に張り出しながら伸び体部下部で急に立ち上がって口縁部に至り、口縁端部が外反するもの。文様やプロポーション、口縁端部の形態などから２つの第三形式に分類できる。

C１＝径が大きく低く踏ん張った高台がつき、体部下部は横に張り出して彎曲しながら上方へ伸び口縁部に至って外反する。口縁外面直下には沈線を施すものが多く、その下から単体スタンプや縦長連続文によって施文する。

C２＝やや径の小さい高台がつき、体部は横に張り出してやや急に彎曲しながら上方へ伸び口縁部が外反する。口縁端部は水平な面をもち、内側で段となる。口縁外面直下に沈線を施し、体部に縦長連続文を施す。

また、口径により６つの第四形式に分類する。

Ⅰ：　口径7.5cm前後のもの。

Ⅱ：　口径11cm前後のもの。

Ⅲ：　口径13.5cm前後のもの。

Ⅳ：　口径15.5cm前後のもの。

Ⅴ：　口径17cm前後のもの。

Ⅵ：　口径20cm前後のもの。

Ｃ１～３はⅣ、Ｃ４・５はⅤに認められる。また、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴはそれぞれ器高によってｈ・ｌに分類される。

椀D：基本的に椀Ａと同形態であるが、高台は径が小さく直下へ伸び、体部は横に張り出さず底部から彎曲して立ち上がり口縁部に至る。口径に比べて器高が高いものである。文様は、口縁外面直下や体部に沈線を施し、その間に単体や連続スタンプ文によって施文する。現在のところ、口径12cm前後のものしか確認できない。

椀E：やや高く踏ん張った高台をもち、体部は平坦な底部から斜め上方へ直線的に伸びて口縁部に至るもので、口径に比べて比較的器高が高い。出土例が少なく第三・四形式の分類は今のところできない。口径14cm前後のものが確認できるのみである。

椀F：径が比較的小さくやや高い高台をもち、体部は横にあまり張り出さずに彎曲気味に立ち上がり口縁部は上方へ伸びる。口縁端部は内傾する。口径に比べて比較的器高が高い。口縁外面直下には沈線を施し、体部には印花文を施文する。高台やプロポーションによって第三形式を設定できそうであるがここでは細分しない。口径によって３つの第四形式に分類する。

Ⅰ：　口径12cm前後のもの。

Ⅱ：　口径13.5cm前後のもの。

Ⅲ：　口径15cm前後のもの。

椀G：椀Cと同様に口縁端部が外反するものであるが、体部下部で稜をなして立ち上がり口縁部に至るものである。高台やプロポーションからいくつかの第三形式に分類できるようであるがここでは細分しない。口径によって３つの第四形式に分類する。

Ⅰ：　口径９cm前後のもの。

Ⅱ：　口径12.5cm前後のもの。

Ⅲ：　口径16cm前後のもの。

椀H：やや大形の形式である。比較的高く踏ん張った高台をもち、やや彎曲して緩やかに立ち上がり口縁端部は外反する。いわゆる黒色土器であり、焼成温度は低い。体部の内外面に単位幅の広いミガキを施す。形態的特徴や胎土、焼成状態などから第三形式に分類できそうであるがここでは細分しない。また第四形式についてもいくつかまとまりがあるようだがここでは細分しない。

4. 蓋（図1）

椀類・壺類・鉢類などと組み合わさるもので、基本的につまみをもつ。第二形式には、蓋A（蓋）、蓋B、蓋C、蓋D、蓋E、蓋F、蓋G、蓋H、蓋I、蓋Jの11種類がある。以下、各々説明するが、そこでは第三形式までの分類にとどめている。蓋の各形式は、それを受ける身部とセットとなるものであるが、蓋の諸形式と身部の形式のセット関係を把握することは現状に於いては困難である。セット関係が想定されるものは各々記述した。

蓋A：半球形に近い頂部をもち、頂部と口縁部の境界には突帯が巡り、口縁部は直下または内側に短く伸びるものである。頂部に沈線を施し、その上下にヘラ描き・コンパス・印花文などによって施文するものもある。崔秉鉉氏のA形式、尹相悳氏のト字形蓋に該当する[13]。この形式は、口縁部に蓋受け部をもつ身部とセットとなることが想定できる。つまみの形態から3つの第三形式に分類する。

A 1＝低く広い環状を呈するもの。高坏Bとセットとなることが多い。

A 2＝径の小さい環状を呈するもので、透し孔を穿孔するものもある。高坏Aとセットとなることが多い。

A 3＝宝珠形をなすもの。

これらはつまみの高低や形態からさらに細分可能であるがここでは分類しない。口径によって5つの第四形式に分類する。

Ⅰ：　口径10.5cm前後のもの。

Ⅱ：　口径11.5cm前後のもの。

Ⅲ：　口径12.5cm前後のもの。

Ⅳ：　口径13.5cm前後のもの。

Ⅴ：　口径16cm前後のもの。

これらは高坏A・Bの口径分類とほぼ一致する。

蓋B：半球形に近い頂部をもち、口縁部にはかえりをもつもので、崔秉鉉氏のB形式、尹相悳氏の入字形蓋に該当する[14]。頂部や口縁部に沈線を施し、その間を施文するものが多い。セットとなる身部の口縁部は直に伸びるものが想定でき、この形式は高坏C・椀A0・鉢Cとセットとなることが多い。形態的特徴からいくつかに細分できるが、ここではつまみの形態から2つの第三形式に分類する。

B 1＝径の小さい環状を呈するもので、A2と同形のもの。

B 2＝宝珠形をなすもの。

皇南洞376遺跡では、口径によって5つの第四形式に分類できる。

Ⅰ：　口径11.5cm前後のもの。

Ⅱ：　口径12.5cm前後のもの。

Ⅲ：　口径13.5cm前後のもの。

Ⅳ：　口径15cm前後のもの。

Ⅴ：　口径18cm前後のもの。

蓋C：やや広い平坦な頂部から彎曲して口縁部に至り屈曲して真下へ伸びるもの。頂部や口縁部に沈線を施し、その間を施文する。セットとなる身部の口縁部は直に伸びるものが想定でき、後述する壺B（広口長頸壺）とセットになることが多い。

蓋D：狭く平坦な頂部から口縁部が急な角度をなしてやや長く下り、口縁端部が小さく下方へ伸びるもの。頂部や口縁部に沈線を施し印花文などを施文するものもある。セットとなる身部の口縁部は直に伸びるものが想定でき、この形式も壺B（広口長頸壺）とセットとなることが多い。つまみの形態から3つの第三形式に分類する。

D 1＝低く広い環状を呈するもの。

Ｄ２＝径の小さい環状を呈するもの。

Ｄ３＝宝珠形をなすもの。

形態的特徴や法量などからさらに細分可能であるが、ここでは分類しない。

蓋Ｅ：狭く平坦な頂部から口縁部が急な角度をなしてやや長く下り、口縁部にはかえりをもち口縁端部は下方へ小さく伸びるもの。頂部と口縁部の境界や口縁部に沈線を施し、その間を印花文によって施文する。セットとなる身部の口縁部は直に伸びるものが想定でき、後述する壺Ｅ２（直口壺）とセットになることが多い。つまみの形態から２つの第三形式に分類する。

Ｅ１＝低くやや広い環状を呈するもの。

Ｅ２＝宝珠形をなすもの。

形態的特徴や法量などからさらに細分可能であるが、ここでは分類しない。

蓋Ｆ：小型の蓋で、頂部から口縁部まで若干傾斜をもつ程度であり口縁部にかえりをもつもの。沈線を施し文様を施文するものもある。セットとなる身部の口縁部は直に伸びるものが想定でき、後述する壺Ｅ１とセットとなることが多い。つまみの形態から細分可能であるがここでは分類しないでおく。

蓋Ｇ：やや高く平坦な頂部から、やや緩慢に彎曲して口縁部に至り屈曲して口縁端部が下方へ小さく伸びて終わるもので、口縁部にはかえりをもつ。頂部から口縁部にかけて印花文によって多く飾られるものである。椀Ａ・Ｂ・Ｄ～Ｆとセット関係にあると考えられる。形態的特徴からいくつか細分可能であるが、ここではつまみの形態から２つの第三形式に分類するにとどめる。

Ｇ１＝低くやや広い環状を呈するもの。

Ｇ２＝宝珠形をなすもの。

また、皇南洞376遺跡の資料は口径によって６つの第四形式に分類できる。

Ⅰ：　口径８cm前後のもの。

Ⅱ：　口径11cm前後のもの。

Ⅲ：　口径12.5cm前後のもの。

Ⅳ：　口径14cm前後のもの。

Ⅴ：　口径16cm前後のもの。

Ⅵ：　口径18cm前後のもの。

Ⅶ：　口径19cm前後のもの。

蓋Ｈ：やや低く広い平坦な頂部から、口縁部が短く下り口縁端部が屈曲し下方へ小さく伸びるもの。頂部と口縁部の境界に沈線を施すものもある。頂部から口縁部に印花文を施文するものもある。頂部やセットとなる身部の口縁部は直に伸びるものが想定でき、椀Ｃとセットとなるものが多い。つまみは基本的に低く広い環状を呈する。形態・文様などからいくつか細分できるが、ここではかえりの有無によって大きく２つの第三形式に分類する。

Ｈ１＝かえりを有するもの。

Ｈ２＝かえりを有さないもの。

蓋Ｉ：蓋ＨとＩの中間的な形態を呈するもので、やや背の高い狭く平坦な頂部をもち、なだらかに口縁部が下りてきて口縁端部で屈曲して下方へ伸びるもの。頂部やセットとなる身部の口縁部は直に伸びるものが想定できる。頂部から口縁部にかけて印花文によって施文される。

蓋Ｊ：頂部から口縁部が円盤状を呈し、中央に高く伸びるつまみを有するもので壺・瓶類の蓋と考えられる。つまみの形態にはさまざまな種類があるが、ここでは３つの第三形式を設定するに留める。

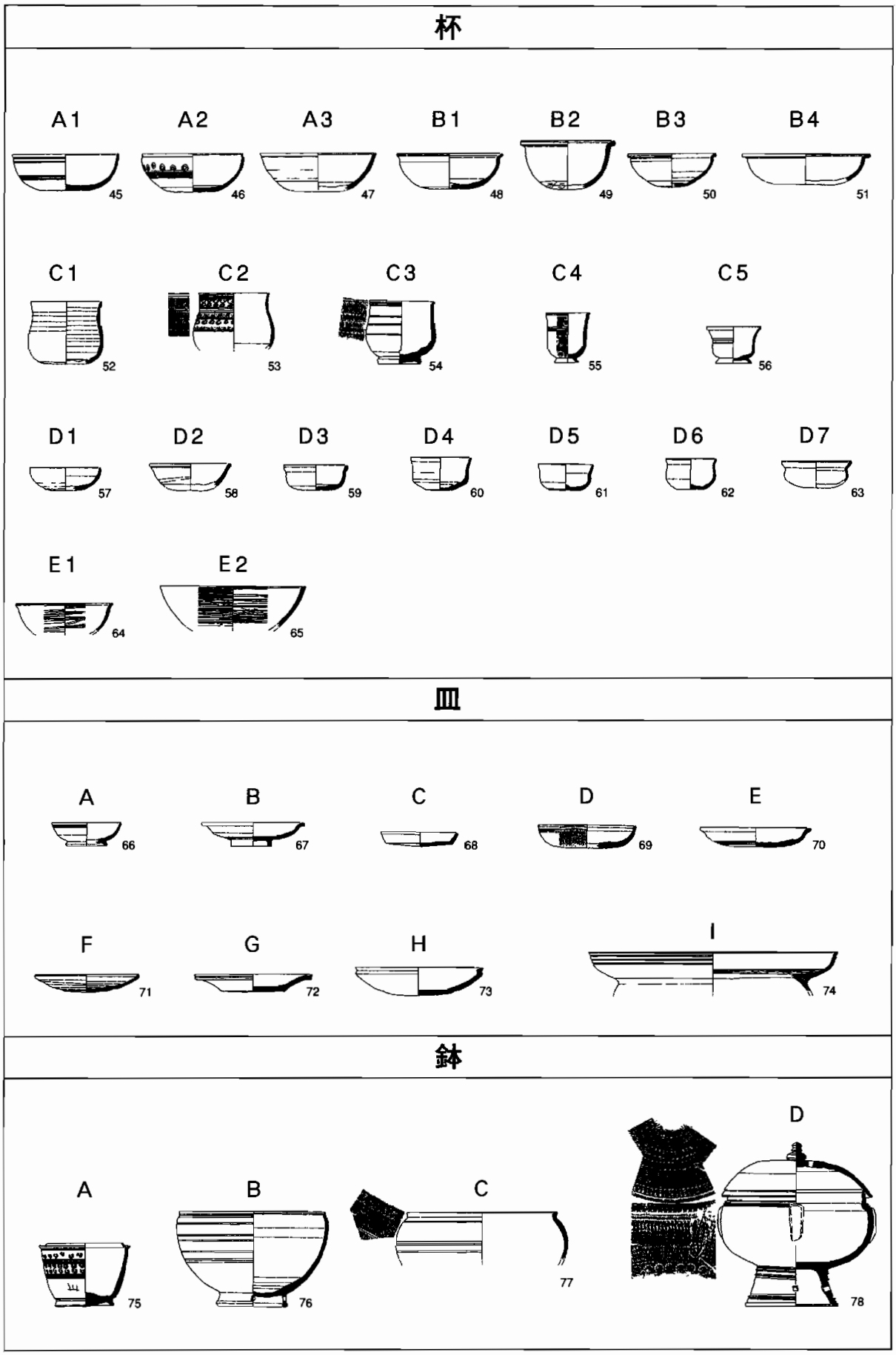
杯
A1
A2
A3
B1
B2
B3
B4
45
46
47
48
49
50
51
C1
C2
C3
C4
C5
52
53
54
55
56
D1
D2
D3
D4
D5
D6
D7
57
58
59
60
61
62
63
E1
E2
64
65
皿
A
B
C
D
E
66
67
68
69
70
F
G
H
I
71
72
73
74
鉢
A
B
C
D
75
76
77
78

図7　形式分類（2）（S：1/8）

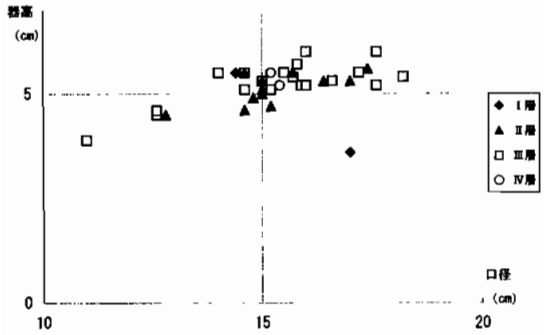

図８　杯Ａ法量分布

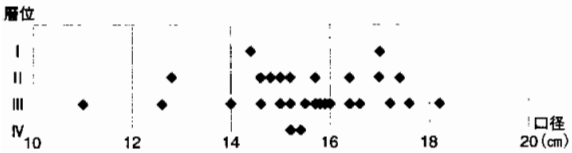

図９　杯Ａ口径分布

Ｊ１＝つまみが単純な円柱状を呈するもの。

Ｊ２＝高く伸びる宝珠形をなすもの。

Ｊ３＝円盤状の頂部上下につまみと栓部分のあるもの。

口径によっても分類可能であるが、ここでは分類しないでおく。

5. 杯（図７）

基本的に無高台であり、平底からやや彎曲しながら口縁部が立ち上がるものである。印花文によって飾られるものが一部に認められる。第二形式には、杯Ａ（椀）、杯Ｂ（椀）、杯Ｃ（杯）、杯Ｄ（椀）、杯Ｅの５種類がある。

杯Ａ：平坦な底部から体部が緩やかに立ち上がり彎曲しながら伸びて口縁部に至る。口縁部は上方に伸び、外面の口縁端部直下や口縁部中央部に沈線を有するもので、作りも比較的丁寧であり印花文によって飾られることがある。口縁部の形態によって２つの第三形式に分類する。

Ａ１＝口縁部は上方へ伸び口縁端部は丸く収めるか内傾するもの。

Ａ２＝内傾する口縁端部をもち、口縁端部外面直下に段をもつもの。

Ａ３＝杯Ａ１と形態的に類似したもので成形・調整の粗雑なものがある。この中でも形態的特徴や口径などから細分も可能であるがここでは分類しないでおく。

このうちＡ１は口径によって４つの第四形式に分類される（図８・９）。

Ⅰ：　口径10.5cm前後のもの。

Ⅱ：　口径13.5cm前後のもの。

Ⅲ：　口径15.5cm前後のもの。

Ⅳ：　口径17.5cm前後のもの。

口径の層位的な変化をみるとⅡ層で口径の縮小化が見られる。ここで行っている第四形式の分類は、示した値を中心とした纏まりがあるということであり、図６・７で見たように、その纏まりは時間と共に変化する。それぞれの纏まりが大型化や小型化することもあり、また融合・分散ということも起こりうる。各形式の口径分布がいかに変動するかという観点も重要である。

各口径において器高の違いからｈ・ｌに分類できる可能性があるが、今のところⅣで確認できるのみである。

杯Ｂ：平底あるいは丸底の底部をもち、体部がやや彎曲しながら立ち上がり口縁部で「く」字に屈曲するもの。作りがやや雑で焼成不良のものが多く、印花文によって飾られないものである。プロポーションや口縁部の形態から4つの第三形式に分類する。

Ｂ１＝やや広く平坦な底部をもち、体部が緩やかに彎曲しながら立ち上がり口縁部が「く」字に屈曲する。口径に対して器高が比較的低い。

Ｂ２＝丸底に近い底部から体部があまり広がらずに高く立ち上がり、口縁部が「く」字に屈曲するもの。

Ｂ３＝径の小さい平坦な底部をもち、体部は角度をもって立ち上がって体部上部（肩部）で張り、口縁部が「く」字に屈曲する。

Ｂ４＝口径に対して器高が非常に低く、体部は立ち上がるとすぐに屈曲し水平に近く伸びる。

このうち杯Ｂは口径から３つの第四形式に分類できる。

Ⅰ：　口径12.5cm前後のもの。

Ⅱ：　口径15.5cm前後のもの。

Ⅲ：　口径17.0cm前後のもの。

杯Ｃ：コップ形を呈するものである。高台の有無やプロポーションから５つの第三形式を設定する。

Ｃ１＝平坦な底部をもち、体部が「Ｓ」字に彎曲しながら立ち上がるもので体部外面に装飾を施さないもの。

Ｃ２＝Ｃ１と基本的に同形態であるが外面に沈線を施すもので、沈線の間に印花文を施文するものもある。

Ｃ３＝Ｃ１と同形態の身部に高台がつくもの。沈線や印花文によって施文されることもある。

Ｃ４＝口径が小さく径に比べ器高の高いもので体部はやや直線的に伸びるもので、高台がつく。沈線や印花文が施文される。

Ｃ５＝高台のつく底部から体部が直線的に立ち上がり、ほぼ中央から外反して口縁部に至るもの。体部外面中央に沈線を施す。

このうちＣ１、Ｃ２、Ｃ３は口径により４つの第四形式に分類できる。Ｃ４とＣ５に関しても分類できると思われるがここでは細分しない。

Ⅰ：　口径８cm前後のもの。

Ⅱ：　口径9.5cm前後のもの。

Ⅲ：　口径11cm前後のもの。

Ⅳ：　口径13.5cm前後のもの。

現在のところ、Ｃ１とＣ２にはⅢとⅣが、Ｃ３にはⅠとⅡが確認されるが、底部まで残存するものが少なくＣ１・Ｃ２・Ｃ３の判別がつかないものが多いため、第三形式の口径分布については資料の増加を待たなければならない。

杯Ｄ：平底の小型の杯で作りが概して粗雑なものである。口縁部に煤が付着している例が多く、灯明皿として利用したと考えられる。主に形態的特徴から７つの第三形式に分類する。

Ｄ１＝平底から体部が緩やかに立ち上がり、彎曲して上方へ短く伸び口縁端部は丸く収める。底部はナデ調整を施す。焼成度は低く軟質であるが灰白～暗黄灰色を呈し、胎土は、いわゆる赤褐色軟質土器のように粗くなく精緻である。成形には粗さが目立つ。

Ｄ２＝底部の状態は分からないが、ロクロケズリを施しているようである。体部は斜め上方へ直線的に伸び端部は丸く収める。いわゆる陶質土器である。

Ｄ３＝平坦な底部から体部が短く伸び口縁端部はやや肥厚して丸く収める。底部はナデ調整を施す。いわゆる陶質土器である。

Ｄ４＝平坦で小さな底部をもち、体部はやや横に張り出してから急に上方へ直に伸びる。胎土は粗雑であり、焼成度も低い。底部端から体部屈曲部まではロクロケズリの後にロクロナデを施す。ロクロケズリは切り離しの際のものか調整段階のものかは不明である。

Ｄ５＝小さく平らな底部から体部がやや横に張り出して彎曲し、口縁部で軽く「く」字に屈曲して外反する。胎土は密で焼成度も高くいわゆる陶質土器である。底部は不調整。

Ｄ６＝小さく平らな底部から体部がやや横に張り出し彎曲しながら口縁部に至り、外に向けて小さく屈曲するが口縁端部は若干内彎する。形態的にはＤ５と類似するが、底部はナデ調整を施し、器壁が薄く胎土が粗雑であり、概して焼成度が低い。後述する甕Ｃと同じ質の土器であり、硬質ではあるがいわゆる陶質土器とは区別されるべきものである。

D７＝Ｄ６と同じ質の土器であるが、口径が比較的大きく、口縁部の屈曲も大きいもの。

杯Ｅ：内外面にヘラミガキを施したものである。出土例は非常に少なく特殊な形式と言える。土器の質や形態的特徴から２つの第三形式に分類する。

Ｅ１＝いわゆる陶質土器である。体部は緩やかに彎曲しながら斜め上方に開いて口縁部に至り、口縁端部は軽く外反する。内外面に２～４㎜幅のミガキをやや粗く施す。成形・調整はやや粗雑である。

Ｅ２＝器表面は黒灰色で断面は灰白色を呈する瓦質土器である。韓国で一般に言われる瓦質土器とは若干異なり、日本のいわゆる瓦器と同質のものである。体部はやや直線的に斜め上方へ広く立ち上がり口縁端部は内傾する面をもつ。胎土は黒色粒子が目立ち砂粒も多く含むやや粗いものである。内外面にミガキが施されるが、軽く施されておりその単位を明確に追うことはできない。内面よりも外面で丁寧にミガキを施す。

6. Ⅲ（図７）

口径に比べて器高が非常に低いものであり、高台のあるものとないものがある。第二形式には、ⅢＡ、ⅢＢ（臺附Ⅲ）、ⅢＣ（平底Ⅲ）、ⅢＤ（丸底Ⅲ）、ⅢＥ（丸底Ⅲ）、ⅢＦ（Ⅲ）、ⅢＧ（平底Ⅲ）、ⅢＨ（丸底Ⅲ）、ⅢＩの９種類がある。

ⅢＡ：低い高台をもち、体部は底部から彎曲しながら立ち上がり口縁端部は丸く収める小型のものである。口縁外面直下には沈線を施す。

ⅢＢ：低い高台がつく広く平らな底部をもち口縁端部が外反するもので、印花文の施文も見られる。体部の立ち上がり方や口縁部の形態から細分できるがここでは分類しない。

ⅢＣ：平坦な底部から角度をもって体部が立ち上がるもので、印花文施文も見られる。口縁部の形態から細分されるがここでは分類しない。

ⅢＤ：丸底に近いやや平らな底部から体部が緩やかに立ち上がり口縁部に至るもの。口縁外面直下には沈線を施し、印花文が施文される。

ⅢＥ：やや丸みを帯びた底部をもち、口縁部が外反するもの。

ⅢＦ：丸みを帯びた底部から体部が境界をほとんど示さずに緩やかに立ち上がり、口縁端部が若干肥厚し上方へ伸びるもの。成形・調整は非常に粗雑である。

ⅢＧ：平坦な底部から体部が角度をもって立ち上がり、外彎しながら開いて口縁端部が若干上方へ伸びるもの。

ⅢＨ：やや丸みを帯びた底部から体部が緩やかに立ち上がり、口縁部が屈曲して上方へ短く伸び口縁端部は内傾する面をもつ。成形・調整には精細さを欠き、焼成度も低く瓦質である。

これらは口径によって分けられるがここでは細分しないでおく。

ⅢＩ：高台をもつ瓦質の大Ⅲである。口縁部外面には３条の沈線を巡らし、底部内面にはミガキを施す。

Ⅲ類にはその性格によって２つの分類ができる。すなわち、端正に作られ印花文の施文まで行われるⅢＡ～Ｄと、成形・調整が非常に粗雑で形態もやや不整形であるⅢＥ～Ｈの二者である。特に、ⅢＦ・Ｈは丸底であり、平坦な台の上に置くと非常に不安定であって、深さのないⅢとして物を盛る場合には不適当な形態と言える。

7. 鉢（図７）

底部からやや深く立ち上がって口縁部で広く開くものをいう。第二形式には、鉢Ａ（有蓋台付鉢）、鉢Ｂ（台付鉢）、鉢Ｃ、鉢Ｄ（台付鉢）の４種類がある。

鉢Ａ：低い高台をもつ平坦な底部をもち、体部が横に張り出すことなく直線的に上方へ高く伸びるもので、高坏Ａ、Ｂと同様の蓋受け部と立ち上がり部からなる口縁部をもつ。体部には沈線を施し、印花文によって施文される

ものもある。法量によって細分できるようであるがここでは細分しないでおく。

鉢B：低い高台がつく丸底に近い底部から体部が斜め上方へ開きながら立ち上がり、体部上端（肩部）で最も張り出して内彎し口縁部に至る。口縁端部は内傾する面をもち上方へ若干伸びる。体部には沈線を施し、高台には小さな透し孔を穿孔する。成形・調整ともに丁寧である。皇南洞376遺跡の資料では、口縁端部に蓋と組み合わせて焼成した痕跡をとどめており、本来有蓋であったと思われる。蔵骨器として使用された例が見られるが、ここでは鉢として取り扱う[15]。

鉢C：体部は上部で最も張り出して肩部をもち、内彎して口縁部に至り小さく屈曲して終わるもの。口縁端部は面をもつ。肩部から体部にかけて沈線を施し、その間に印花文を施文する。

鉢D：2～3条程度の突帯を巡らせ、透し孔を穿孔するやや高い脚部をもち、身部は、体部が横に張り出し彎曲しながら立ち上がって口縁部に至る。口縁部で屈曲し直上して終わる。口縁端部や肩部で沈線を施し、口縁端部から脚部に至るまで印花文によって多く飾られる。体部の四方向に縦長の粘土帯を貼り付ける。本来、蓋を伴う形式である。形態的特徴から高坏Cからの系譜が想定される。

8. 壺（図10）

壺に分類されるものは非常にバラエティーに富む。杯や高坏に比べ各形式の出土量も少なく大まかな全体像を掴むのも困難な情況にある。第二形式には、壺A（瓶・長頸壺）、壺B（長頸壺）、壺C（臺附短頸壺）、壺D（瓶）、壺E（直口壺）、壺F（壺）、壺G（壺）、壺H（壺）、壺I（大壺）の9種類がある。

壺A：一般的に長頸壺と呼ばれるもので、低い高台のつく平坦な底部に、球形、楕円形、算盤珠形の体部に細長く伸びる口頸部をもつ。口縁部は外方に開き屈曲して立ち上がり、基本的に外面に沈線を施す。印花文によって多く飾られる土器である。法量によって5つの第四形式に分類される。

Ⅰ：　器高8cm、体部最大幅9cm前後のもの。

Ⅱ：　器高18cm、体部最大幅13.5cm前後のもの。

Ⅲ：　器高16cm、体部最大幅18cm前後のもの。

Ⅳ：　器高18cm、体部最大幅21cm前後のもの。

Ⅴ：　器高30cm、体部最大幅30cm前後のもの。

壺B：丸底あるいは平底に低い高台がつき、球形に近い体部から径の広い口頸部が伸びる広口長頸壺である。頸部や肩部に沈線を施し、ヘラ描きや印花文などによって施文する。口縁部や高台などの形態的特徴からいくつかの第三型式に分類できるが、ここでは底部や体部の形態によって大きく2つの第三型式を設定する。

B1＝丸底をもち、体部が球形に近いものが多い。

B2＝平底をもち、体部が楕円形に近いものが多い。

壺Bは法量によって4つの第四型式に分類される。

Ⅰ：　器高10cm、体部最大幅11cm前後のもの。

Ⅱ：　器高13cm、体部最大幅13.5cm前後のもの。

Ⅲ：　器高15cm、体部最大幅15cm前後のもの。

Ⅳ：　器高22cm、体部最大幅23cm前後のもの。

壺C：低い高台をもち球形に近い体部から広く短い口頸部が伸びる広口短頸壺である。肩部に沈線を施し、その間をヘラ描き・コンパス・印花文によって施文する。

壺D：低い高台がつく平坦な底部をもち、楕円形に近い体部から広くやや短い口頸部が伸びて口縁部で開き屈曲して上方へ伸びるもので、壺Bを二重口縁にしたような形態である。頸部や肩部に沈線を施し、その間に印花文

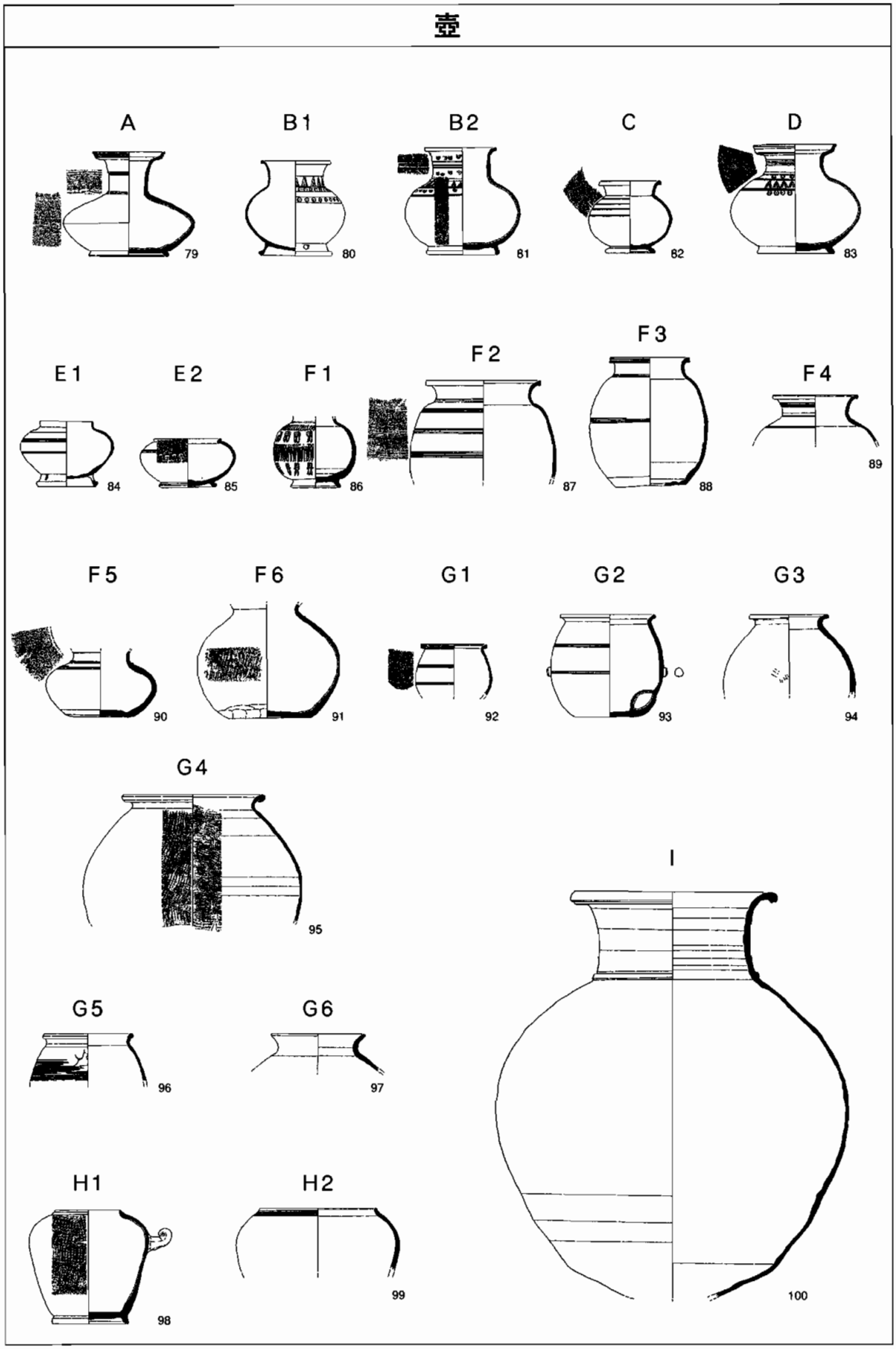

図10　形式分類（3）（S：1/8）

を施す。

壺E：丸底あるいは平底に低い高台がつき、体部は横に張り出し上方で最大径をもって肩部をなし、内彎して口縁部へ至り上方へ短く屈曲するもので、いわゆる直口壺である。肩部や体部に沈線を施し、その間をヘラ描きや印花文によって施文する。口縁部や体部の形態によっていくつか分類できるが、ここでは口縁部の形態によって2つの第三形式に分類する。

E 1 ＝口縁部が比較的長く直上して伸びるもの。

E 2 ＝口縁部が非常に小さく、若干上部に伸びる程度のもの。

これらを法量によって3つの第四型式に分類する。

Ⅰ：　体部最大径9cm前後のもの。

Ⅱ：　体部最大径13cm前後のもの。

Ⅲ：　体部最大径15cm前後のもの。

壺F：楕円形を呈する体部をもち、広い径の頸部が立ち上がる広口壺である。体部、口縁部、文様などから6つの第三形式に分類する。

F 1 ＝球形あるいは卵形の体部をもち、頸部は肩部よりやや窄んだ位置から立ち上がるもの。口縁部から体部にかけて印花文によって多く飾られる。ロクロ成形である。

F 2 ＝やや肩部の張る胴長の体部をもち、肩部からあまり絞らずに頸部が立ち上がるもの。頸部下端部には突帯が巡る。体部には沈線が施され、その間を印花文で施文する。ロクロ成形である。

F 3 ＝平底に胴長の体部をもち、肩部があまり張らずにやや窄んで頸部が立ち上がるもの。口縁端部は外面に凹線を巡らす。頸部下端部には突帯が巡り、体部中央には沈線を施す。底部は不調整で底部端部と体部下端部に弱いロクロケズリを施す。胎土は粗雑であり、後述する甕Cの胎土に近いが焼成状態はよい。ロクロ成形である。

F 4 ＝肩の張る体部をもち、肩部からやや窄んで頸部が立ち上がるもの。頸部と肩部に沈線を施す。ロクロ成形である。

F 5 ＝平底をもち、体部は中央からやや上部で強く張って肩部を形成し、小さく窄んで頸部が立ち上がるもの。頸部下端には突帯を巡らし、頸部と肩部に沈線を施し、肩部から体部中央まで印花文を施文する。

F 6 ＝平底をもち、体部は中央で膨らんで球形に近く、大きく窄んで頸部が立ち上がるもの。口縁端部は上部にやや引き出し肩部に沈線を施す。

各第三形式は形態的特徴・法量などからさらに細分されるが、ここでは分類しないでおく。

壺G：体部や頸部から頸部が立ち上がることなく屈曲して口縁部にいたる短頸壺である。形態的特徴などから6つの第三形式に分類する。

G 1 ＝小型の壺である。卵形の体部に広く開いた口縁部からなり、口縁端部外面には凹線が巡る。体部に沈線を巡らし、その間を印花文で施文する。ロクロ成形である。

G 2 ＝G 1を大型にした形態であり、体部に沈線を施し、体部中央には把手状あるいはボタン状の粘土を貼り付ける。

G 3 ＝卵形の体部から小さく窄んで口縁部が立ち上がるもので、口縁端部は上方へ若干引き出す。体部内外面には叩き・当て具痕をとどめる。体部に沈線を施すものもある。

G 4 ＝やや大型である。体部が大きく膨らみ、やや窄んで口縁部が立ち上がるもので、口縁端部は外側へ巻き込んで丸く収める。体部内外面に叩き・当て具痕をとどめる。焼成度は低く瓦質に近い。

G 5 ＝あまり膨らまず寸胴な体部から、径の広い口縁部からなる。口縁端部は外側に小さく巻き込み丸く収める。

体部にはカキメが見られる。焼成度は低く瓦質である。

G 6 ＝瓦質土器であり、口縁部は凹凸をほとんどもたずシンプルに立ち上がり、口縁端部は丸く収める。口縁部内面の調整はロクロ回転を利用するも非常に弱く、ナデに近い。

これらは形態的特徴や法量によって細分できるが、ここでは細分しないでおく。

壺H：体部が上部で張って肩部を形成し、やや窄んで口縁部がほとんど立ち上がることなく終わる無頸壺である。形態的特徴からいくつか分類されるが、ここでは大きく文様の有無によって２つの第三形式に分類する。

H 1 ＝高台をもつ平底に肩の張るやや縦長の体部が伸びるもので、体部全面に亘って印花文を施文し多く飾られる形式である。上側に巻き込む把手がつく。

H 2 ＝肩部をもつ体部には文様が無く、肩部より下の内外面で叩き・当て具痕をとどめるもの。

これらは法量によっても細分されるがここでは分類しないでおく。

壺Ｉ：大型の壺であり、やや肩部の張った卵形に近い体部に、口縁部で大きく開く広く長い頸部がつく。頸部端部には突帯が巡り、口縁端部は外側に巻き込む。肩から体部にかけて突帯を巡らすものがある。焼成度は基本的に高く陶質であるが、瓦質もみられる。形態的特徴や法量から細分可能であるが、ここでは分類しない。

9. 骨壺（図11）

骨壺として作られたものをまとめて呼称する。蔵骨容器にはさまざまな種類の土器が用いられており、本来は別の用途で製作されたと考えられるものも存在する。ここでは蔵骨器として利用することを意図して作ったと思われる形態に限って分類を行い、第二形式には骨壺Ａ（連結把手付骨壺）、骨壺Ｂ（盒形骨壺）、骨壺Ｃ（円筒形骨壺）の３種類を設定する。しかし、蔵骨容器の種類は多様であり、その把握と分類はさらに押し進めていく必要がある。骨壺は印花文によって華やかに装飾される形式である。骨壺については鄭吉子氏と宮川禎一氏の研究がある。[16]

骨壺Ａ：蓋と身が組み合わさって盒子状を呈し、蓋と身を連結するための把手（連結把手）を有するもので、いわゆる連結把手付骨壺といわれるものである。連結把手の位置から２つの第三形式に分類する。連結把手付骨壺については宮川禎一氏の論文に詳しい。[17]

Ａ 1 ＝蓋と身を組み合わせたときに連結把手が離れた位置にあるもの（宮川氏のいうＡ形態）。

Ａ 2 ＝蓋と身を組み合わせたときに連結把手が接する位置にあるもの（宮川氏のいうＢ形態）。

この他、つまみや高台の形態、プロポーションなどによって細分可能であるが、ここでは分類しない。

骨壺Ｂ：蓋と身が組み合わさって盒子状を呈するもの。骨壺Ａの内容器として用いられたと考えられているものである。

骨壺Ｃ：円筒形を呈するもので、細長い身部につまみのついた面長の蓋が組み合わさる。

10. 瓶（図11）

一定の膨らみをもつ体部に非常に小さな口頸部がつくものである。第二形式には瓶Ａ（瓶）、瓶Ｂ（瓶）、瓶Ｃ（粘土帯瓶）、瓶Ｄ（瓶）、瓶Ｅ（瓶）、瓶Ｆ（瓶）、瓶Ｇ（印花文長頸瓶）の７種類がある。

瓶Ａ：平坦な底部に球形や楕円形の体部をもち、小さく窄んで短い口頸部が伸びる。口縁部や体部の形態から細分可能であるがここでは行わない。

瓶Ｂ：小型で、口頸部は若干広く、短く伸びて口縁端部は外径する面をもつ。頸部に沈線と印花文を施すものがある。

瓶Ｃ：肩の張った林檎形の体部に数条の隆帯を縦に貼り付けたもので、隆帯の間を印花文で施文するものもある。隆帯をもたない同形態のものもここに含めておく。

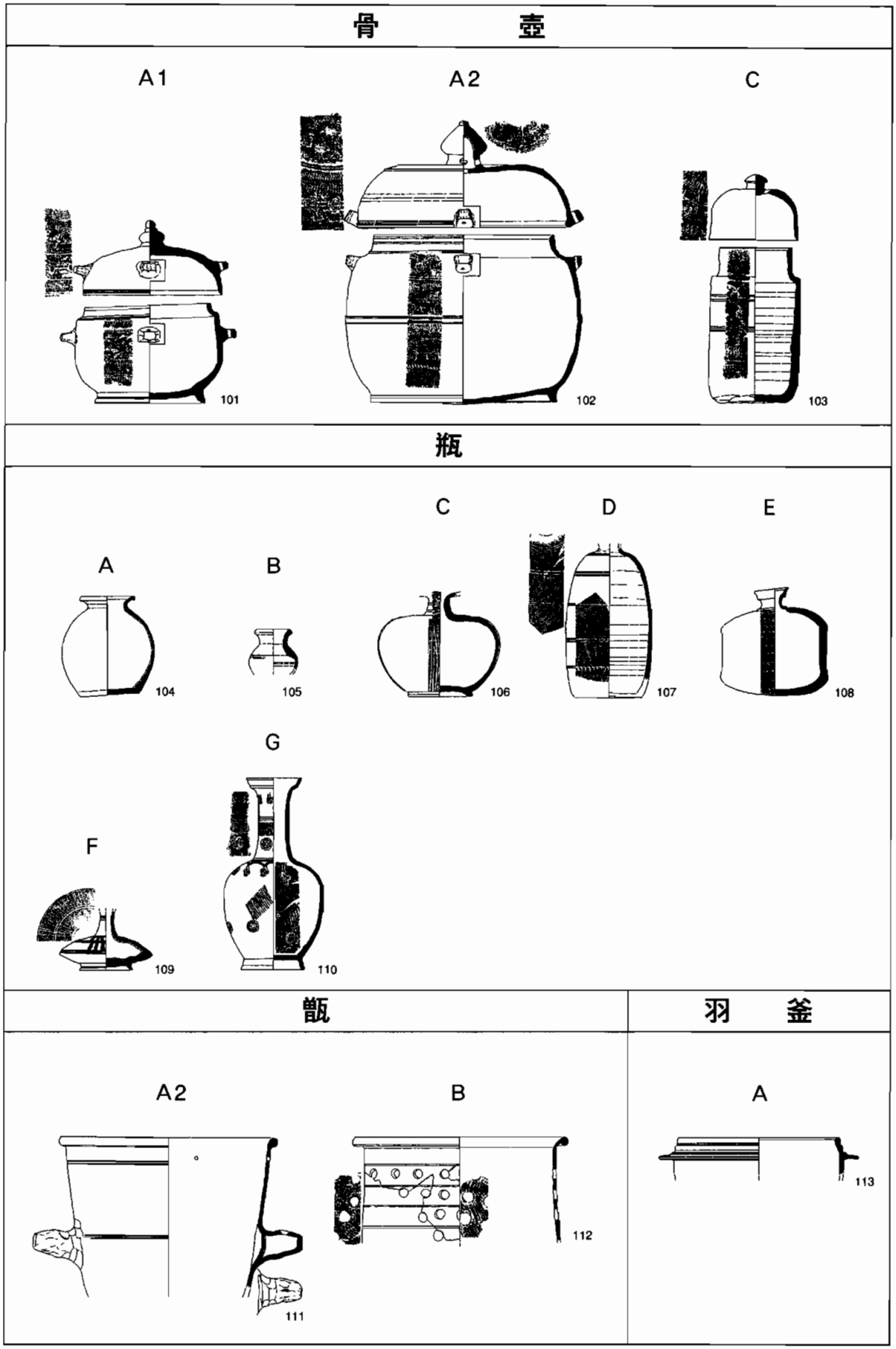

図11　形式分類（4）（S：1/8）

瓶D：細長い砲弾形の体部から若干肩部を形成して径の小さな口頸部が伸びるもの。肩部から体部にかけて沈線を施し、その間を印花文で施文するものもある。

瓶E：体部が樽形を呈するもの。体部に印花文を施すものもある。

瓶F：体部が算盤珠を呈し、非常に小さい径の口頸部がつくもの。沈線や印花文・波状文などを施文するものがある。

瓶G：高台がつく、やや細長く肩部が若干張る卵形の体部をもち、頸部が細長く伸びて口縁部で開き、屈曲して上方に伸びるもので、いわゆる浄瓶である。頸部に沈線を施し、頸部から体部にかけて印花文を施す。

瓶の各形式はそれぞれ形態的特徴・法量などから細分可能であるがここでは分類しないでおく。

11. 甑（図11）

深鉢形を呈し、体部ほぼ中央の向かい合う位置に把手をもち底部に孔を穿つものであり、叩き痕跡をとどめる装飾性のない土器である。第二形式には、甑A（甑）、甑Bの2種類がある。

甑A：底部に円形あるいは細長い孔を複数穿ち、体部は深鉢状に高く伸びるもので、体部ほぼ中央の向かい合う位置に把手をもつ。口縁部や底部の形態から2つの第三形式に分類する。

A1＝丸底から口縁部でやや広く開いて立ち上がる体部をもち、口縁部は外反し口縁端部に面をもつもの。土器の質は陶質であり、

A2＝平底からやや上方に深く立ち上がる体部をもち、口縁部は大きく外反することなく直立し、口縁端部は外側に巻き込んで丸く収めるもの。土器の質は瓦質であり、外面全面に単位の確認できない粗いミガキが施され、体部に沈線を巡らすものもある。

これらは底部穿孔や形態的特徴、法量によって分類可能であるが、ここでは細分しない。

甑B：円筒形の体部に円形の孔を複数穿ち、口縁部は外方に開いて口縁端部は外側に巻き込んで丸く収める。甑としたが、その用途は不明である。

12. 羽釜（図11）

直立する口縁部外面に、ほぼ水平に伸びた羽が巡るものである。口縁部には沈線が巡り、口縁端部はやや内側に絞り内傾する面をもつ。土器質は瓦質であり、上述した甑Aとセットとして用いられたと考えられる。ここでは第二形式に分類できないが、他の資料との比較を考慮し、羽釜Aと呼ぶ。

13. 甕（図12）

平底の深鉢形を呈し、丸みを帯びた体部をもち口縁部は広く開くものであり、叩きの痕跡をとどめるものもあり装飾性のない土器である。器表面に煤が付着したものが散見され煮炊きに用いた可能性が高い。第二形式には、甕A（甕）、甕B（壺）、甕C（把手付壺）、甕D（甕）の4種類がある。

甕A：丸底から球形に近く内彎して広口の口縁部に至るもので、基本的に向かい合う両側に把手をもち口縁端部は肥厚する。体部の内外面には叩き・当て具痕をとどめる。土器質は瓦質である。これらは法量によって分類可能であるがここでは細分しない。

甕B：球形に近い体部からやや小さく窄んで頸部が立ち上がるもので、体部の向かい合う位置に把手をもつ。形態的特徴や技法などから2つの第三形式に分類する。

B1＝卵形の体部から口縁部が外方へ短く伸び、口縁端部は外側で面をもって上方へ小さく伸びる。体部内外面には叩き・当て具痕をとどめており、外面の叩きは縄蓆文である。叩きの後に軽くロクロナデを施す。把

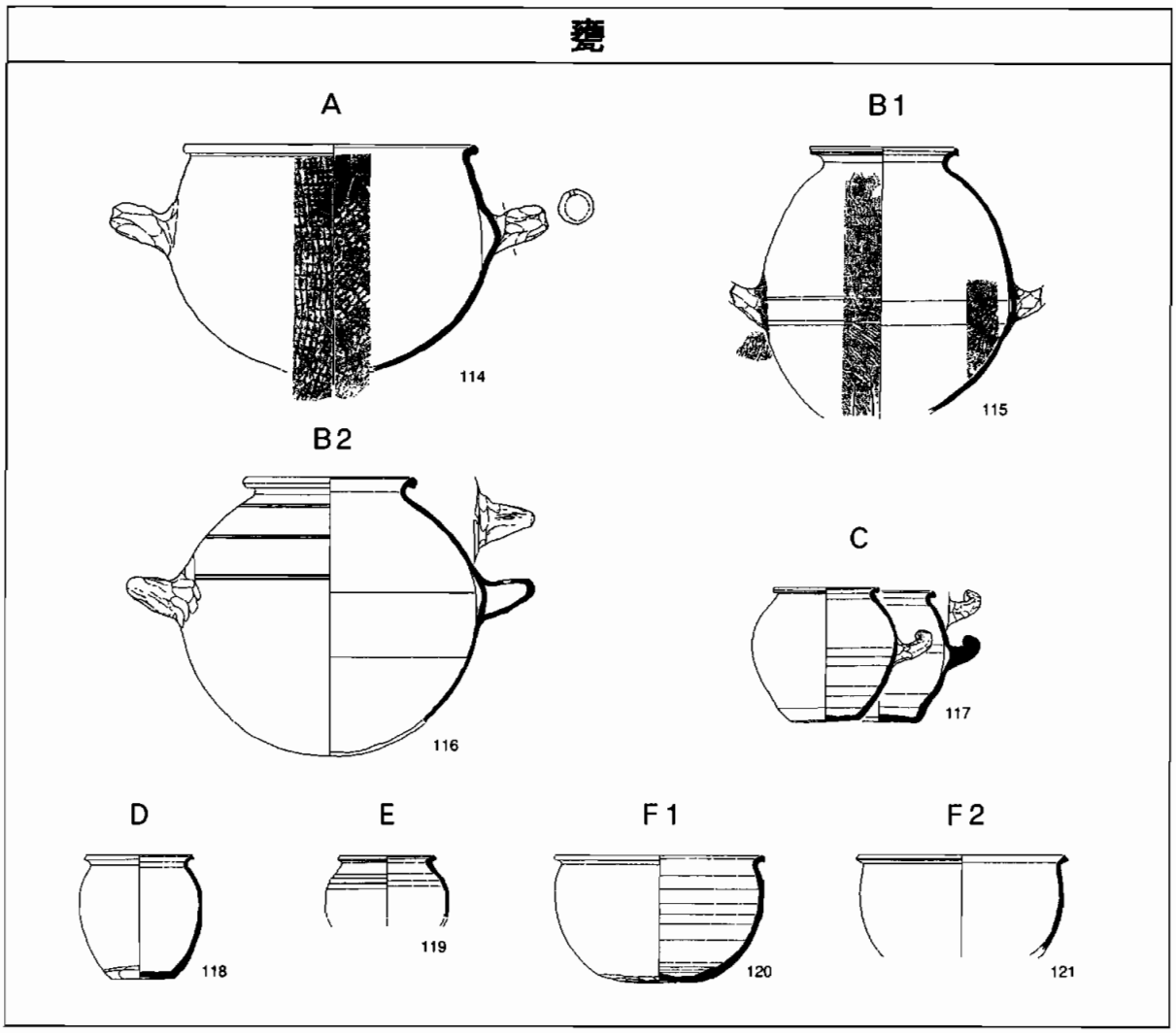

図12　形式分類（5）（S：1/8）

手は貼り付けた後、おそらく叩き具によって再度接合部の成形・調整を行う。二次被加熱痕がみられることから、煮炊きに用いた土器と考えられる。

B２＝口縁部は外方へ短く開き口縁端部は外側に巻き込んで丸く収める。体部内外面には叩き・当て具痕をとどめる。体部中央の向かい合う位置に把手がつき、把手は空洞で先窄みに成形しており、やや丁寧にナデて仕上げる。体部には沈線を施す。土器の質は瓦質である。

甕C：平底をもち、体部はほぼ中央でやや張って彎曲するもので、基本的に轆轤を利用して薄く成形し、小型は手捏ね成形を行う。頸部で若干窄んだ後口縁部が外方へ屈曲し、口縁端部は上方へ小さく引き出す。底部中央は不調整で、底部端部と体部下端部にケズリ調整を施す。体部ほぼ中央に上側に巻き込む把手を貼り付けるが、体部内面から押し込むものと押し込まずに貼り付けるものがある。胎土は砂粒を多く含んで粗雑であり、焼成度もそれほど高くはなく色調は黒褐色を基調とするもので、この形式に一般的に見られる土器質である。これらは口径によって３つの第四形式に分類される。

Ⅰ：　口径7.5cm前後のもの。

Ⅱ：　口径12cm前後のもの。

Ⅲ：　口径14.5cm前後のもの。

甕D：平底をもち、体部は面長に立ち上がって口縁部が外方へ屈曲し、口縁端部は外傾する面をもつ。内外面にロ

クロナデを施すが、体部内外面には叩き・当て具痕をとどめる。底部端部と体部下端部にケズリ調整を行う。土器質は甕Cに一般的に見られる粗製の土器である。

甕E：体部上部からに4つの段をなしながら窄んで口縁部に至るもの。粗製の土器である。

甕F：丸底に近い底部をもち、体部が彎曲しながら立ち上がり口縁部に至る。口縁部は「く」字に屈曲し短く外反し口縁端部は外傾する面をもつ。はっきりとした痕跡は確認できないが、胎土や土器の質から煮炊きに用いた可能性が高い。成形技法や口縁端部の形態などから2つの第三形式に分類する。

F 1 ＝体部内外面にロクロ目が確認できるもので、口縁端部はやや鈍い面をもつもの。底部は中央を除いてヘラケズリを施し、後述する甕Cと同様のやや粗い胎土で、やや焼成温度も低い。

F 2 ＝体部内外面に叩き成形の痕跡を留めるもので、口縁端部は鋭い面をもつもの。胎土は密だが焼成温度は低く瓦質である。

以上、第一形式13種類、第二形式72種類、第三形式122種類に分類し、各々説明してきた。古墳出土資料に比べて非常に多様な様相を示していることがわかる。先述したように、ここで行った形式分類は型式に置き換えられる可能性があり、すべての形式が必ずしも同時に存在したというのではない。したがって、これらの形式は型式分類を行う中で同系列に該当するものをまとめていかなければならない。

法量による第四形式は、各形式内に法量から見た纏まりが確認されるということであり、必ずその法量を守っていると言うことではない。それは、各形式の法量が常に一定ではなく時間と共に変化するものであり、したがって、群の分布する中心が流動的なものであるからである。今のところ、第四形式という分類は、各形式がここで分類した程度の差をもって纏まる群を形成しているということにとどまる。今後、型式編年の編成作業の中でその変化を明らかにし、各時期の法量による群の在り方を追求していかなければならない。なぜなら、第四形式とした法量の変遷・消長を追うこと自体が様式の把握に繋がるからである。

5. 新羅土器の諸特徴

以上、7～8世紀代の新羅土器について無機質な説明を長々と続けてきたが、依然、個々の形式に関しては詳述すべきことは多い。しかし、それらすべてを述べることはできないので別稿に譲り、ここでは全体的に言えることを整理しておきたい。上述した形式には、各形式を超えた諸属性によってまとめることができる（表1）。一つは土器の質であり、一つは用途・機能であり、一つは印花文施文割合による装飾性の有無である。これらは相関関係にあり、それぞれが意識されて土器製作が行われたと考えられる。様式の把握をする場合、こういった視点も重要になってこよう。以下、これらについて簡単にまとめておきたい。また、各形式の説明の中で、技法や法量規格などから形式分類できる可能性を指摘したが、これについても若干整理しておく。

（1）土器質の分類

形式分類の際に若干触れてきたが、土器の質は大きく分けて3種類が存在する。いわゆる陶質土器、瓦質土器、赤褐色軟質土器の系譜にある粗製の土器である。陶質土器には焼成度の低いやや生焼け状のものも含めている。同一形式においても、良く焼け締まり自然釉に覆われているものと、焼成不良の軟質のものとが認められるのであり、両者を明確に区別することが困難だからである。両者は基本的に同じ技術によって同じように焼成されたと考えられるのでまとめて呼称するが、形式によって軟質・硬質の割合に差が認められる。このことから、同一の窯で同時に焼成したとしても窯詰めの際にはその配置を考慮していたと思われる。

瓦質土器は、一般的には、韓国原三国時代を代表する土器の一つで、灰色を基調とし吸水性の強いやや軟質の土

器のことであるが、ここでいう瓦質土器とは、日本の中世に見られる瓦器椀や火鉢などのいわゆる瓦質土器、あるいは現・近代の瓦に近く、器表面は黒灰色で光沢をもち断面は灰白色を呈するもので、透水性は保つものの比較的硬質に焼き上がっているものであって原三国時代のそれとは区別される。両者を区別するため別の名称で呼ぶ方が分かりやすいが、ここでは瓦質土器としておく。

粗製の土器であるが、作られた土器の形態や胎土から赤褐色軟質土器の系譜にあることは確実である。しかしながら、色調は黒褐色に近く、硬度も硬質のものが多く赤褐色軟質土器とは言い難い。その用途・機能面にも、前段階とは変化が認められる。ここでは、黒褐～黒灰色を基調とし砂粒を多く含む粗い胎土をもち、やや硬質に焼け締まるもので甕や壺類に多く見られる軽く薄作りの土器を軟質系粗製土器と呼称する[18]。古墳出土の新羅前期様式土器に多く見られる赤褐色軟質土器の有蓋鉢とは色調や焼成状態だけでなく用途も異なると考えられる。粗製土器に多く見られる甕・壺類の形態は前期様式土器にもみられ、従来、赤褐色軟質土器と捉えていた一群内にも、特に時期が降るにつれて、質・機能面での分化が見られる可能性があり、今後こういう視点からの再検討が必要であろう。

また、皇南洞376遺跡ではその存在比率が非常に低いが、椀Hに見られる黒色土器と杯Ｄ１に見られる緻密な胎土をもつ素焼きの土器が存在する。椀Hは雁鴨池から多く出土しており、皇南洞376遺跡の所属年代よりも新しい時期に増加するものと考えられる。その祖形は陶質土器の椀Ｃ類と考えられ、陶質のものも存在する。ここではこれといって名称を与えないが、将来的には分類すべきものであろう。杯Ｄはいわゆる土師質の土器であり、日本中近世の土師Ⅲと同じ様相を示すものである。皇南洞376遺跡出土資料中では１点確認したのみであり、この１点をもって土器質の分類を行うことは躊躇される。今後の資料増加を待ち取り扱うべきであろう。

これらの土器は、成形においては基本的に轆轤を用いており、手捏ね成形は見られない。

表１　諸形式の特徴

形式 第一	第二	第三	土器質	用途	装飾性
高坏	A	1	陶質	供膳	低
		2	陶質	供膳	低
	B	—	陶質	供膳	低
	C	1	陶質	供膳	低
		2	陶質	供膳	無？
	D	—	陶質	供膳	無
	E	1	陶質	供膳	無
		2	陶質	供膳	無
		3	陶質	供膳	無
	F	—	瓦質	供膳	無
高台蓋杯	A	—	陶質	供膳	低
	B	—	陶質	供膳	低
椀	A	0	陶質	供膳	無
		1	陶質	供膳	高
	B	1	陶質	供膳	高
		2	陶質	供膳	高
		3	陶質	供膳	高
	C	1	陶質	供膳	高
		2	陶質	供膳	高
	D	1	陶質	供膳	高
	E	—	陶質	供膳	高
	F	—	陶質	供膳	高
	G	—	陶質	供膳	高
	H	—	(黒色土器)	供膳	低
甕	A	1	陶質	供膳	低
		2	陶質	供膳	低
		3	陶質	供膳	高？
	B	1	陶質	供膳	高
		2	陶質	供膳	高
	C	—	陶質	貯蔵	高
	D	1	陶質	貯蔵？	高
		2	陶質	貯蔵	高？
		3	陶質	貯蔵	高？
	E	1	陶質	貯蔵	高
		2	陶質	貯蔵	高
	F	—	陶質	貯蔵	高
	G	1	陶質	供膳	高
		2	陶質	供膳	高
	H	1	陶質	供膳	高
		2	陶質	供膳	高
	I	—	陶質	供膳？	高
	J	1	陶質	貯蔵	低？
		2	陶質	貯蔵	低
杯	A	1	陶質	供膳	低
		2	陶質	供膳	低
		3	陶質	供膳	無
	B	1	陶質	供膳	無
		2	陶質	供膳	無
		3	陶質	供膳	無
		4	陶質	供膳	無
	C	1	陶質	供膳	無
		2	陶質	供膳	低？
		3	陶質	供膳	低
		4	陶質	供膳	高
		5	陶質	供膳	無
	D	1	(軟質)	照明	無
		2	陶質	照明	無
		3	陶質	照明	無
		4	陶質	照明	無
		5	陶質	照明	無
		6	粗製	照明	無
		7	粗製	照明	無
	E	1	陶質	供膳	無
		2	瓦質	供膳	無

形式 第一	第二	第三	土器質	用途	装飾性
Ⅲ	A	—	陶質	供膳	無
	B	—	陶質	供膳	低
	C	—	陶質	供膳	低
	D	—	陶質	供膳	高？
	E	—	陶質	供膳	無
	F	—	陶質	供膳	無
	G	—	陶質	供膳	無
	H	—	陶質	供膳	無
	I	—	瓦質	供膳	無
鉢	A	—	陶質	供膳	低
	B	—	陶質	骨壺？	低
	C	—	陶質	供膳？	低？
	D	—	陶質	供膳？	高
壺	A	—	陶質	貯蔵	高
	B	1	陶質	貯蔵	高
		2	陶質	貯蔵	高
	C	—	陶質	貯蔵	高
	D	—	陶質	貯蔵	高
	E	1	陶質	貯蔵	高
		2	陶質	貯蔵	高
	F	1	陶質	貯蔵	高
		2	陶質	貯蔵	高？
		3	陶質	貯蔵	無
		4	陶質	貯蔵	無？
		5	陶質	貯蔵	高？
		6	陶質	貯蔵	無
	G	1	陶質	貯蔵	低
		2	陶質	貯蔵	無？
		3	陶質	貯蔵	無
		4	陶質	貯蔵	無
		5	陶質	貯蔵	無
		6	瓦質	貯蔵	無
	H	1	陶質	貯蔵	高
		2	陶質	貯蔵	無
	I	—	陶質	貯蔵	無
骨壺	A	1	陶質	埋葬	高
		2	陶質	埋葬	高
	B	—	陶質	埋葬	高
	C	—	陶質	埋葬	高
瓶	A	1	陶質	貯蔵	無
	B	—	陶質	貯蔵	低
	C	—	陶質	貯蔵	高
	D	—	陶質	貯蔵	低？
	E	—	陶質	貯蔵	低
	F	—	陶質	貯蔵	低？
	G	—	陶質	貯蔵	高？
甑	A	1	瓦質	煮沸	無
		2	瓦質	煮沸	無
	B	—	瓦質	煮沸	無
羽釜	A	—	瓦質	煮沸	無
甕	A	1	瓦質	煮沸	無
	B	1	瓦質	煮沸	無
		2	瓦質	煮沸	無
	C	1	粗製	煮沸	無
	D	—	粗製	煮沸	無
	E	—	粗製	煮沸	無
	F	1	粗製	煮沸	無
		2	瓦質	煮沸	無

（2）用途形態としての分類

各形式の土器を形態や土器の質、使用痕跡などから用途を推測し、その用途に還元・分類するならば、供膳形態、貯蔵形態、煮沸形態、照明形態、埋葬形態の５つの用途形態に分けられる。また、皇南洞376遺跡では確認されなかったが、陶硯などの文具形態とでも言うべきものも存在する。ここで言う煮沸形態には調理用の土器も含めての名称として用い、照明形態とは灯明皿の類を言い、埋葬形態とは埋葬用土器という意味で用い、甕棺や骨壺の類を言う。食事形態の復元という意味からいえば、照明形態・埋葬形態・文具形態というものは厳密に言えば省くべきであるが、その認識や判別が未だ不明確な部分は多い。ここでは、韓炳三氏が注目した古墳出土品である副葬土器という分類は用いなかったが、これは、生活（消費）遺跡において、同時に存在する諸形式の中から副葬用の形式を抽出することが困難であり、また、抽出できたとして、果たしてその形式が副葬用土器として位置づけられるものであるのかという疑問があったためである。それは古墳出土資料をみても副葬用として生産され用いられた土器というよりは、寧ろ、当該期においては、日常生活用の土器を二次的な使用によって副葬したと捉える方がよいと考えたからである。資料が蓄積され古墳出土資料と生活（消費）遺跡出土資料との比較研究の進展により、将来的に分類できる可能性もあろうが、ここでは用いないでおく。

供膳形態・・・高坏Ａ～Ｆ、椀Ａ～Ｇ、杯Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ、皿Ａ～Ｉ、鉢Ａ・Ｃ・Ｄ。

貯蔵形態・・・壺Ａ～Ｉ、瓶Ａ～Ｇ。

煮沸形態・・・甑Ａ・Ｂ、羽釜Ａ、甕Ａ～Ｆ。

照明形態・・・杯Ｄ。

埋葬形態・・・骨壺Ａ・Ｂ・Ｃ・(鉢Ｃ)。

（文具形態・・・陶硯など）

これらの用途による分類と土器の質とはほぼ対応しており、供膳形態・貯蔵形態・埋葬形態・(文具形態）は基本的に陶質土器であり、煮沸形態である甑、羽釜、甕Ａ・Ｂ・Ｆ２は軟質である瓦質土器であり、甕Ｃ・Ｄ・Ｆ１は軟質系粗製土器である。つまり、供膳形態・貯蔵形態には食事を盛ったり貯蔵するのに適した陶質土器が使用され、埋葬形態には内容物を保護し、また装飾するため硬質で綺麗な胎土の土器が使用され、煮沸形態には煮炊きに適した胎土・焼成度である瓦質土器・軟質系粗製土器を使用しているのであり、用途に応じた作り分けが成されているのである。もちろん、同じ供膳形態や貯蔵形態であっても焼成不良のものや瓦質に近いものは認められるが、総体的に眺めるならば、形式差と土器質との間には明らかに相関関係があるのであって、そこに作り分けた意識・意図を汲み取ることは十分に可能だと考える。こういった作り分けの状態がいつから生じたのかという視点も、今後、様式的な把握をしていく際には必要となってこよう。

（3）各形式に見られる装飾格差

上述した各形式の中には、印花文によって装飾される土器と装飾されない土器がある。また、装飾される場合であってもその割合に差が認められる。そこで、装飾性の割合によって高飾性・低飾性・無飾性に分類を試みる。高飾性とは、印花文の出現から衰退期にかけて、あるいはその形式の出現以降、常に装飾の対象とされ華やかに飾られるものであり、低飾性とは、印花文の施文は認められるがその割合が低く、ごく単純な施文に終わるものやごく短期間のみみられるものであり、無飾性とは、印花文の流行とは無縁であり施文がみられないものである。

甕・甑・羽釜などの煮沸形態では無飾性がほとんどであって装飾性が低く、逆に供膳・貯蔵形態では装飾性の高いものが多い。ただ、供膳・貯蔵形態ともに高飾性・低飾性・無飾性が認められ、供膳・貯蔵という大きな分類では装飾性は区別できない。供膳・貯蔵形態の中で装飾性にランクが存在するようである。但し、現状では各形式の型式組列を把握することが困難であり、ここでいう高飾性と低飾性との区別は現段階では不明確な部分が多い。しかし、この視点も、様式設定においては重要なものとなり得るのであり、今後の課題としたい。

新羅土器の装飾性に関しては、江浦洋氏が日本出土の新羅土器を分析した中で触れている。[19] 江浦氏は、畿内、とりわけ大和の飛鳥・藤原地域で印花文を施文する長頸壺の出土多いことに注目し、機能性と装飾性を兼備した土器として選ばれたもので外交使節によって齎されたと結論づけている。容器として用いる限り機能性の重視は当然であり、正式な外交使節が齎したものであれば外見上の見栄えも重視された可能性が高い。しかし、長頸壺（本稿の壺A）が特別装飾性に富んだ形式でないことは見てきた通りであり、壺形態は基本的に高飾性のものが多い。印花文自体をみても、壺Aだけが特別な文様であるということはない。

壺Aは当該期の貯蔵形態では出土量を見ても中心的な形式の一つと言えるのであり、寧ろ、一般的な器形であったと考えられる。したがって、日本への搬出においては、基本的には、装飾性以上に機能性が重視されたと解釈すべきであろう。ただし、日本出土の新羅土器のうち、特に畿内からは緑釉陶器の出土が比較的多く、[20] 新羅でも出土量の少ないこの緑釉陶器に関しては容器自体にも価値を認めていたものと考えられる。

（4）形式の細分要素

各形式において法量による規格が認められ、それによって細分できることを指摘したが、本稿ではすべての形式で時間差による検討を行い得ず、したがって、これらの分類については今後検証していかなければならない。ただ、層位的な検討を行ったものから言えば、法量による規格性は存在し、時間を経るごとに全体として縮小傾向にあることは確認できたと思う。[21] また、単に口径のみによる規格性に止まらず、同一の口径であっても身部の深浅によって分類することができた。これについては層位的な検討ができなかったが、時間差ではなく並存した可能性が高い。したがって、供膳形態、特に椀類においては非常に多くの種類が並存したものと考えられる。

さらに、焼成時の痕跡によっても分類できたが、特に、高坏C（無蓋高坏）からは多くのことが分かった。まず、口縁端部に見られる藁状痕跡をともなう自然釉の存在（E）から、本来は蓋を伴う形式であることが分かった。これについては、出土状況から有蓋である可能性が指摘されていたが、重ね焼きの痕跡からより明確に言えるものである。次ぎに、蓋と重ねて焼成せず、身部内面に他個体を重ねた痕跡を留めるもの（L）も存在していることが分かった。この両者は痕跡を確認して初めて分類されるのであって、口縁端部や底部内面に重ね焼きの痕跡をとどめていないものは分類不可能であり、今後、痕跡を留める資料を集めてその傾向を検討する必要がある。この二者の解釈については、1. 有蓋と無蓋の差、2. 工人差・生産地の差、3. 時間差（型式差）の可能性がある。高坏C１では各口径でE・Lの両者がみられ、高坏C２ではLの痕跡が認められる。E・Lを解釈するためにはここで扱う資料だけでは少なすぎるため、今後の課題としたい。

新羅王京には各地の土器が集まっていた可能性があり、時間差だけでなく地域性にも注意を払わなければならない。地域性を示すものとしてよく用いられるのは、成形技法の差から生じる形態差や胎土がある。本稿での細分では胎土をあまり重視しなかったが、同形式であっても胎土の特徴によって区別が可能であり、これらは生産地を反映している可能性が高いと考える。これについては別稿で述べたい。

6. おわりに

「新羅王京様式」構築の前段階として、７～８世紀代を中心とする新羅土器の様相を把握しようと試みたわけであるが、ある程度の見通しを立てることができたと思う。すなわち、当該期の新羅土器は、大きく陶質・瓦質・粗製土器の３種類に分けることができ、それぞれ用途によって作り分けていた。当該期の日本の土器と比較するならば、日本の土師器という存在が非常に特異であることがわかる。新羅土器からみれば、特に、杯・椀・皿などの供膳形態で須恵器と同等かそれ以上に土師器を用いることはまったく異様である。確かに、椀Hのように黒色土器のような土器も存在するが、それらは陶質の供膳形態が衰退した後に増加するようであり、７世紀代ではほとんど見

られない。透水性のある土器質を供膳形態に用いる日本での様相は新羅土器と比べると決して合理的とはいえず、こういった合理性を超えた原理の追究が土器様式の特質を理解する手掛かりとなると考える。このように、形式組成の中における土器質の比較検討によって、日韓土器様式の特質の一端を示すことが可能である。

さらに、印花文によって装飾されるものとされないものが存在し、その装飾性の中にもランクが認められた。したがって、形式ごとに印花文施文に差があるということになり、このことは、当該期の中心的編年体系である印花文編年の応用姿勢に疑問を投げかけるものとなる[22]。

法量には規格性が認められるのであり、数値を示すことはできないものの、それによって形式組成における供膳形態の割合が非常に高くなっている。今後は、時間の経過による形式組成の変化についても検討を行っていくことが必要である。また、重ね焼きの痕跡から焼成方法の違いを明らかにすることや胎土による群別を行うことによって、地域色を把握することも可能となり得る。ただ、これらの違いが何を示すのかは検討を要する問題ではあるが、人文科学においては仮説を立てて検証を繰り返すことが重要であり、そういう意味でこういった見通しを立てることは必要だと考える。本稿での成果は、今後、個別の分析を深めていくことができる基礎を設定できたことであると信じる。個々の分析については、逐次発表していく予定である。

本稿は皇南洞376遺跡出土資料を中心に分析したものであり、ここで示した様相だけをもって新羅中心地の土器群と言えるものではなく、あくまでも一消費地の様相を漠然と示したに過ぎない。今後、ここで提示した分類を、生活遺跡における層位的な分析を通して比較検討し、形式と型式の検証を重ね、新羅王京内で消費された土器様式の把握に努める必要がある。

謝辞

本稿は、2002年度に奈良大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部である。本稿をまとめるにあたり水野正好先生と植野浩三先生から多くのご指導、ご教示を賜りました。また、韓国での資料調査では安在晧、金斗喆、黄尚周、朴光烈、金鎬詳、鄭香蘭の諸先生方に大変お世話になりました。この他にも多くの方のご協力を賜りました。記して深甚たる謝意を表します。

奥井智子、金姓旭、金泰龍、田部剛士、崔相泰、張曉星、東國大學校考古美術科諸学生、野田卓、濱岡大輔、皇甫垠淑（敬称略、五十音順）。

註

（1）崔秉鉉　1987「新羅後期様式土器의 成立試論」『三沸金元龍教授停年退任紀念論叢』Ⅰ－考古學篇　三沸金元龍教授停年退任紀念論叢刊行委員會。

（2）洪潽植　2001『６～７世紀代新羅古墳研究』釜山大學校一般大學院史学科　文學博士學位論文、洪潽植　2001「６～７世紀代 新羅土器의 제문제-편년・양식・학산을 중심으로-」『第10回嶺南考古學會學術發表會　６～７世紀嶺南地方의 考古学』嶺南考古學會。

（3）申敬澈氏は報告書の中で、「（木槨墓と石棺系石槨墓を中心とする：筆者）Ⅰ期の「共通様式」土器文化が、嶺南地域という一定の地域内で土器文化上に様式差が認定されないことを意味するのに対し、（横穴・横口式石室墓の時代である：筆者）Ⅲ期の「統一様式」土器文化は、空間をさらに拡大し、漢江流域を含むそれ以南の全域にかけて様式差が認定されない土器文化を意味する」と定義している（釜山大學校博物館　1985『金海禮安里古墳群』Ⅰ　本文　p.313, l.26～28）。

（4）東潮・田中俊明　1988『韓國の古代遺跡』1新羅編　中央公論社 pp.139～208。

（5）私は、2001年10月から約１年の間、東國大學校慶州キャンパス博物館において当遺跡の調査をする機会を頂いた。その際、報告されていない多くの資料も調査することが許された。ここで用いる資料はその時のものであり、未報告資料が大半であるが、東國大學校の安在晧先生から使用許可を頂いた。朴光烈　外　2002『慶州皇南洞376統一新羅時代遺蹟』東國大學

校慶州캠퍼스博物館。

（6）金昌錫　2001「皇南洞376유적 출토 木簡의 내용과 용도」『慶州地方　典籍文化　研究』東國大學校新羅文化研究所、李鎔賢・金昌錫　2002「경주황남동376유적 출토 木簡의 고찰」『慶州皇南洞376統一新羅時代遺蹟』東國大學校慶州캠퍼스博物館。

（7）重見　泰「7世紀前後における新羅土器「有蓋高坏」の形態変化－立ち上がりは型式指標となり得るのか－」（2004年4月に投稿済み）。

（8）様式論全般や形式の細分においては小林行雄氏の論考の他、寺沢薫氏の論考を参考にした。小林行雄　1933「先史考古学に於ける様式問題」『考古学』4－8、小林行雄　1933「弥生式土器様式研究の前に」『考古学』4－8、小林行雄　「弥生式土器の様式構造」『考古学評論』第2輯、寺沢薫　1980「大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と二・三の問題」『奈良市　六条山遺蹟』奈良県立橿原考古学研究所。

（9）以下で用いるナデとは、布・皮による表面調整で、ロクロを用いるものをロクロナデと呼ぶ。ヘラケズリとは表面を削りとるものを言い、ロクロを用いるものをロクロケズリと呼ぶ。

(10) 前掲註7）重見論文。

(11) 前掲註7）重見論文。

(12) 前掲註7）重見論文。

(13) 崔秉鉉　1984「皇龍寺址出土　古新羅土器」『尹武炳博士回甲紀年論叢』尹武炳博士回甲紀年論叢刊行委員会、尹相悳　2001「6～7世紀新羅土器相對編年試論－慶州芳内里古墳群　자료를 중심으로－」『韓國考古學報』45　韓國考古學会。

(14) 前掲註13）論文。

(15) 鄭吉子氏の研究に拠れば、鉢Cは本来骨壺として取り扱うべきかも知れないが、早い段階で古墳埋葬部からも出土する例があり、特にその出現段階において、火葬を前提とする蔵骨器を意図して製作したかどうかについては今後の検討課題だと言える。したがって、ここでは鉢に分類しておく。また、内容器で椀形のものがあるが、それだけを見て蔵骨器と判断することは不可能であるのでここでは鉢類に分類した。鄭吉子　1980「新羅蔵骨容器研究」『韓國考古學報』8　韓國考古學研究會。

(16) 前掲註12）鄭吉子論文、宮川禎一　1989「新羅連結把手付骨壺の変遷」『古文化談叢』第20集発刊記念論集（中）　九州古文化研究会。

(17) 前掲註13）宮川論文。

(18) 赤褐色軟質土器と系譜を同じくするということで、黒褐色軟質土器と呼ぶことも可能であろうが、焼け締まりの程度や色調による名称では、まったく同じ形態・胎土であり、仮に一緒に焼成したものであっても焼成状態の善し悪しによって両者は異なる種類の土器として分類される可能性がある。現に、古墳出土の一括資料中に同形態で同じ胎土をもつものであるが、赤褐色軟質土器と若干灰色がかり一部陶質になっているものとが認められる。本来、両者は同一の土器であり、赤褐色で軟質の土器を意図したものであるが、たまたま後者は還元焼成に近い状況にあったものである。これを軟質土器・陶質土器と分類することは本来の器種組成を見誤ることになろう。このように、色調と焼け締まりの程度（硬質・軟質）での単純な分類名称は避けるべきだと考える。

(19) 江浦　洋　1992「古代日羅関係の考古学的検討Ⅰ－何故、新羅の土器は海を渡ったのか－」『考古学論集』第4集　歴文堂書房、江浦　洋　1994「海をわたった新羅の土器－土器からみた古代日羅交流の考古学的研究－」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5　名著出版。

(20) 日本出土の新羅土器集成には主に次ぎの文献がある。江浦　洋　1988「日本出土の統一新羅系土器とその背景」『考古学雑誌』第74巻第2号、板橋正幸　2001「栃木県内出土の新羅土器について－西下谷田遺跡出土新羅土器を中心として－」『研究紀要』第9号　（財）とちぎ生涯学習文化財団　埋蔵文化財センター。

(21) 椀・皿類の法量規格性とその推移については、雁鴨池の資料をもとに宮川禎一氏も言及しており、宮川氏の分析では本稿で分類した複数の形式を同時に扱っている。これについて、私は、特に椀類では本稿で分類した形式が型式差とはなり得ないと考えているが、これについては別稿で詳述したい。宮川禎一　2000「新羅印花文土器の文様分析－慶州雁鴨池出土土器の検討－」『朝鮮古代研究』第2号　朝鮮古代研究刊行会。

(22) 当該期の年代決定には印花文編年が主に用いられているが、凡形式的に応用されている。印花文編年については、宮川禎一氏の一連の研究がある。主要論文には次ぎのものがある。宮川禎一　1987「文様からみた新羅印花文陶器の変遷」『高井悌三郎先生喜寿記念論集　歴史学と考古学』 高井悌三郎先生喜寿記念事業会、前掲註13）宮川論文、同　1993「新羅印花文陶器変遷の画期」『古文化談叢』第30集（中）　九州古文化研究会、同　2000『陶質土器と須恵器』日本の美術　第407号　至文堂。

図版出典（転載図面は再トレース）

＜図８～12＞

１ ～21・24・25・28・34・37・39・40・44～52・57～66・71・74～77・87・92・94～97・99・100・104・105・107・111～121：皇南洞376遺跡（出典12），22：隍城洞遺跡（出典４），23：大邱時至地区生活遺跡５Ｇ－９（出典17），26・56・70・98：財買井址（出典７），27：芳内里（乾川休憩所）６号墳（出典５），29：競馬場予定敷地Ｃ－Ⅰ－１－19号石槨墓（出典13），30・80：西岳里石室墳（出典19），31：芳内里（乾川休憩所）41号墳（出典５），32：芳内里42号墳（出典６），33：芳内里40号墳（出典６），35：芳内里36号墳（出典６），36・85・93：芳内里７号墳（出典６），38：月城垓字（出典３），41：皇南洞211－４遺跡（出典10），43・67・68・72・73・110：雁鴨池（出典１），53：競馬場予定敷地Ｃ－Ⅰ－２－９号石槨墓（出典13），54：芳内里（乾川休憩所）12号墳（出典５），55・106・108：王京地区内가스管理設地（出典８），69：城東洞386－６遺跡溝２号（出典18），78：出土地不詳（名古屋市博物館所蔵）（出典15），83：旭水洞나－30古墳（出典16），79：華山里６号墳（出典14），81：旭水洞가－35古墳（出典16），82：芳内里49号墳（出典６），84：芳内里（乾川休憩所）34号墳（出典５），86：隍城洞690－３遺跡（出典11），101～103：出土地不詳（国立慶州博物館）（出典９），109：沙正洞459－９遺跡（出典２）。

出典

１．金正基　外　1978『雁鴨池發掘調査報告』文化広報部文化財管理局

２．慶尚北道文化財研究院　2001『慶州市沙正洞459－９番地収拾發掘調査報告』

３．慶州古蹟發掘調査團　1990『月城垓字　發掘調査報告書』Ⅰ

４．國立慶州博物館　2000『慶州隍城洞遺蹟』Ⅰ

５．國立慶州文化財研究所　1995『乾川休憩所新築敷地發掘調査報告書』

６．國立慶州文化財研究所　1996『慶州芳内里古墳群』

７．國立慶州文化財研究所　1996『財買井址發掘調査報告書』

８．國立慶州文化財研究所　1996『王京地區内가스管理設地發掘調査報告書』

９．鄭吉子　1980「新羅蔵骨容器研究」『韓國考古學報』８　韓國考古學研究塊會

10．大邱大學校博物館　2002『慶州皇南洞建物新築豫定地發掘調査報告書』

11．朴光烈　外　2002『王京遺蹟』Ⅰ　東國大學校慶州캠퍼스博物館

12．朴光烈　外　2003『慶州皇南洞376統一新羅時代遺蹟』 東國大學校慶州캠퍼스博物館

13．韓國文化財保護財團　1999『慶州競馬場豫定敷地Ｃ―Ⅰ地區發掘調査報告書』

14．釜山大學校博物館　1983『蔚山華山里古墳群』

15．宮川禎一　1993「新羅印花文陶器変遷の画期」『古文化談叢』第30集（中）

16．嶺南大學校博物館　2002『大邱旭水洞古墳群』

17．嶺南文化財研究院　1999『大邱時至地區生活遺蹟』Ⅰ

18．嶺南文化財研究院　1999『慶州城東洞386－６番地生活遺蹟』

19．尹武炳・朴日薫　1968「慶州西岳里石室墳發掘調査」『考古學』第一輯